Historical Studies of Socialist System

ISSN 2432-8774

社会主義体制史研究

No.30（Sep. 2022）

戦前期ドイツ共産党（KPD）の変遷

ー東独支配党 SED 指導部の背景ー

青木國彦（東北大学名誉教授）

Die veränderungen der KPD vor dem Krieg

Die Hintergründe der DDR-Führung

Kunihiko AOKI (Prof., Dr., Tohoku University)

既刊リスト　past issues

社会主義体制史研究会
The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System

『社会主義体制史研究』(Historical Studies of Socialist System)

ISSN 2432-8774

Website: https://journal-hsss.com

Publisher (発行): 社会主義体制史研究会

(The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System)

size: A4

mail to journal.hsss99gmail.com (99 = at mark)

past issues (既刊リスト) pp. 26-27

不定期刊(原稿があり次第発行)、文字数制限なし、無料のオンライン・ジャーナルです。旧社会主義諸国(共産圏)の歴史(「革命」前・体制転換後を含む)と、社会主義や共産主義の思想・理論を対象に批判的検証を志しています。投稿歓迎。

表紙写真 左: ローザ・ルクセンブルク(Rosa Luxemburg)

右: カール・リープクネヒトと二番目の妻ゾフィー(Sophie and Karl Liebknecht)、最初の妻の子3人

(出所)(Public Domain)左: https://en.wikipedia.org/wiki/Rosa_Luxemburg#/media/File:Rosa_Luxemburg.jpg
https://en.wikipedia.org/wiki/Karl_Liebknecht#/media/File:Sophie_and_Karl_Liebknecht.jpg

二人は戦前ドイツ共産党(KPD)結党の、戦後東独支配党ドイツ社会主義統一党(SED)結党の、さらに東独建国の理念を体現するとされ、二人が殺害された1月(1919年)に毎年東ベルリンをはじめ各地で二人の遺志を継ぐ「闘争デモ」が開催された。しかしボリシェビキ化・スターリン化したKPDも、SEDもローザが社会発展の鍵と考えた「異論の自由」の教えを守ることはなかった。東独末期にクラウチクとクリーアという芸術家夫妻がローザの「異論の自由」を示す言葉を復活、普及させ、体制転換へと人々を鼓舞した。

「テールマンを大統領に」(1925年KPDの選挙運動)

(出所)左:Bundesarchiv Bild 183-14686-0026、右:Bundesarchiv Bild 102-12940
(ともにde.wikipediaから。CC BY-SA 3.0 de。)

(注)左図:KPDの1925年大統領選挙キャンペーン、右図:その候補者テールマン(Ernst Thälmann、1886-1944)。KPDはスターリンに倣ってテールマン個人崇拝の演出を強めた。戦後すぐに東独で出版されたドイツ社会〔主義〕統一党(SED)編(佐藤経明訳1954)『ドイツ共産党三十五年』は、1920年にドイツ独立社会民主党左派を「党に引き入れた」ことから、戦後1946年のSED成立まで、戦前・戦中・戦後のほぼすべての出来事をテールマンの功績ないし遺志の実現として描いた空論である。彼の演説などの稚拙さにうんざりする党員さえいた。彼が祭り上げられ保身し得たのは、何よりも「プロレタリア」出身という共産党にとってのシンボル性と上部組織コミンテルン、ボス・スターリンへの忠誠心ゆえであった。

社会主義体制史研究 30 号(2022 年 9 月)* Historical Studies of Socialist System*, No.30,Sep. 2022

戦前期ドイツ共産党(KPD)の変遷
ー東独支配党 SED 指導部の背景ー

青木國彦**

Die veränderungen der KPD vor dem Krieg : Die Hintergründe der DDR-Führung

Kunihiko AOKI**

目次

1. はじめに 1
2. 戦前期ドイツ共産党(KPD)党大会・党協議会 2
3. コミンテルン世界大会・執行委員会総会 3
4. KPD 歴代最高幹部 59 人と指導部 1675 人およびその運命 3
5. KPD の「地区」組織 6
6. KPD 政治局 7
6.1. 小史 7
6.2. 主要選出時期の最高指導部の特徴 8
6.2.1 1919 年最高指導部(10 年後に残るのは 1 人) 8
6.2.2. 1924 年の政治局(劇的左転換) 8
6.2.3. 1929 年の政治局(スターリン化政治局) 9
6.2.4. 1935 年の政治局 9
6.3. 政治局員等名簿(1924-1939) 9
7. KPD 内の分派 10
7.1. 右派(die Rechten) 10
7.2. 中間派(Die Mittelgruppe)・宥和派(die Versöhnler) 10
7.3. 左派(Die Linken) 11
7.4. 極左派(Die Ultralinken) 11
7.5. 党機構派(Apparat und Fachleute)〔党官僚〕 11
7.6. 党機構派と KPD スターリン化=「一枚岩」化 12
7.7. 革命における議会と暴力 13
7.8. 党機構と関連組織の専従職員 14
8. KPD 本部・中央委員会(ZA と ZK)等(1919-1939 年) 14
9. ドイツ国会選挙結果(1919-1933 年) 17
10. 非合法化された KPD の国内指導体制 18
11. 「ドイツ人民戦線のための呼びかけ」署名者と掲載誌 18
12. KPD 中央委員会文書が主に言及した人物 19
13. KPD の下部組織と分裂グループ 22
13.1. 下部組織・支持組織 22
13.2. 「分裂グループ」 23
(補注 1)戦前 KPD・戦後 SED のイデオローグであったヴィンターニッツ(Joseph Winternitz) 23
(補注 2)ヴィトルフ・スキャンダル(Wittorf-Affäre) 24
略語・引用文献 24

＜表・写真＞

表 1 KPD 党大会 3
表 2 KPD 党協議会 3
表 3 コミンテルン世界大会 3
表 3a コミンテルン執行委員会(EKKI)総会 3
表 4 戦前期 KPD 歴代最高幹部 59 人の在任期間と運命 3
表 5 戦前 KPD 最高幹部 59 人の「社会的背景」 5
表 6 KPD 最初の都市周辺地区 6
表 6a KPD 地区組織 6
表 6b KPD 各地区の党員比重と人口比重の対比 6
表 7 ヒトラーの首相任命からナチ独裁完成へ(1933 年) 7
表 8 ドイツ国会選挙結果:得票率・獲得議席(1919-1933 年) 17
表 8a ドイツ国会選挙結果:得票数(1924-1932 年) 18
表 9 ドイツ隣接諸国設置の KPD 地域指導部(1937~1939) 18
表 10 「ドイツ人民戦線のための呼びかけ」署名者 19
表 11 KPD 中央委員会(ZA・ZK)文書が主に言及した人物 20
表 12 KPD 下部組織・支持組織 22
表 13 KPD「分裂グループ」 22
写真 1 KPD(スパルタクス同盟)創立大会会場 2
〃2 ベルリンのプロイセン議会(上記大会を開催) 3
〃3 創立大会選出「KPD 指導機関(Führungsorgan)12 人 8
『社会主義体制史』既刊リスト 26

1. はじめに[1]

以下は戦前期ドイツ共産党(KPD)の組織のあり方や党内闘争などの変遷に関連するデータをまとめ、補足説明を加えた。

戦後ソ連占領地区に建国された東独(正式略語は DDR)を支配したのは、建国より少し前、1946 年発足の SED(ドイツ社会主義統一党)であった。

SED はソ連占領下で KPD の東独部分がドイツ社会民主党(SPD)の東独部分と合同した党であり、だから「統一党」である。しかしその実態は前者による後者の吸収であり、東独 KPD の改名にすぎなかった。

合同前の KPD、特に戦前期の KPD は創立以来約 30 年間、勢力を拡大しつつも、多くの紆余曲折を経験した。特に、党内対立(分派闘争)と外部干渉(ソ連共産党やコミンテルン)、ナチ政権による弾圧、スターリンによる粛清などによって多くの幹部や一般党員が命を失い、あるいは除名されたり、離党した。

戦後もソ連の圧力によりいわゆる「米国スパイ」ノエル・フィールド関連の粛清が実施された。その対象はナチ・ドイツから西欧に亡命した幹部であった。但し東独の戦後粛清は同時期のハンガリー、チェコスロバキアなどや戦前期 KPD に比べればわずかであった(青木 2022)。

戦後の東独指導部を主に担ったのは、戦前期の分派闘争とソ連による粛清、ナチによる殺害、戦後粛清などを生き残った幹部たちであった。その際には個々の幹部相互の敵対・同調関係も重要である。そうした事情は該当幹部の個人伝記を見るだけでは十分には理解し得ない。

そこで、その間にどのような論争と方針変遷、幹部交代があり、どのような幹部が生き残って東独建国に当たったのか、また消されるか排除された幹部はどういう人たちだった

---

* in: https://journal-hsss.com
** 東北大学名誉教授。Prof. emer., Dr., Tohoku University

[1] …は引用原文自体の、…は青木による省略、〔〕内は青木の、[]内は原文内の追記である。

のか、彼らはどういう相互関係にあったのかを知ることが、東独史を見る上で必要な知識になる。

こうしたことは早くから指摘されてきた。例えば、大著 Duhnke（1972）が邦訳に寄せた「日本版への序文」には、「SED を十分に理解するためには、亡命および地下運動期の十二年間〔1933-1945 年〕におけるドイツ共産党の浮沈について、或る程度の知識をもたない限り、それは不可能である」とある。

これはむろん 1933 年以前の KPD にも該当する。そこで本稿を作成することにした。

以下の人名のうち**表 4** 登場人物は日本語の姓のみ記し、多数の人名列挙では日本語表記を省略する。

本稿には戦前期 KPD 内部抗争史の具体的な様相に触れ得ないので、別にミュンツェンベルクとその伴侶グロス、またノイマンとその妻のケースを取り上げる予定である[2]。

東独は KPD 創設の中心人物リープクネヒトとルクセンブルクを建国の祖とし、2 人の遺志を継ぐ決意表明として毎年 1 月（2 人の殺害月）に 2 人の大きな写真を先頭に各地で「闘争デモ」を挙行した（東ベルリンでは公称 20 万人）。この行事も SED が事実上東独 KPD だったことを露呈した。

「闘争デモ」は実際には名ばかりで、職場割り当てで動員された人々のだべりながらのぶらぶら歩きであり（同伴した体験）、しかも東独指導部が 2 人の「遺志」を本当に受け継いだかと言えば、甚だ怪しかった。

SED 政治局員シャボウスキーはベルリンの壁開放を 1 日早めたうっかり記者会見で有名）だが、同じ 1989 年のある夜に、誰かからもらった Levi（1921）を読み、ローザ・ルクセンブルクのレーニン的独裁批判に「感動」し，2 年後の著書（Schabowski 1991: 159f）にローザの言葉を幾つも引用した（青木 2016:166）。

中でも重要なローザの言葉は有名な「異論の自由」の不可欠さの主張である（Luxemburg 1918:359）。戦前の Levi 版でなくても、東独版ローザ全集（Luxemburg 1918）に収録されたのだから、容易に読むことができたはずである。

にもかかわらず最高幹部の一人が国家滅亡の直前にようやくそれを読んで、感激した。だから東独指導部が長年ローザの「遺志」にいかに無関心であり、ただ単に彼女の非業の死を利用し祭り上げてきたにすぎないことが分る。

1988 年 1 月東ベルリンでの「闘争デモ」に出国派がローザのこの言葉を横断幕に描き参加を試みた。国民的人気歌手から反体制に転じたクラウチクが彼らにこの言葉を教えた。参入は直前の路上で阻止されたが、逮捕場面を西独テレビが報じ、東独全国に知られた。その継承として翌年 1 月ライプチッヒの「闘争デモ」の際には巧みな戦術で当時の東独としては画期的な規模の沈黙デモ行進が成功し、革命の「総稽古」になった（詳しくは青木 2016、青木 2021）。

こうして 70 年ぶりにローザの言葉が人々を鼓舞した。シャボウスキーがその言葉を「1989 年のある夜」に読んだのは、これら両事件によって初めてこの言葉を知ったからだろう。遅すぎた。それは東独建国の祖かつ KPD の祖と東独指導部の間にあった断絶を象徴する一例でもあった。

2. 戦前期ドイツ共産党（KPD）党大会・党協議会

1918 年の「11 月革命」は 4 日のキール軍港水兵反乱をきっかけとし、労兵レーテ（レーテの意味はソビエト同様に評議会）が各地に広がり、8 日ミュンヘンで、9 日ベルリンでの革命となり、皇帝が退位し、リープクネヒトが「社会主義共和国」を宣言した。9 日スパルタクス・グループは機関紙「赤旗」（Die Rote Fahne）を発刊した。

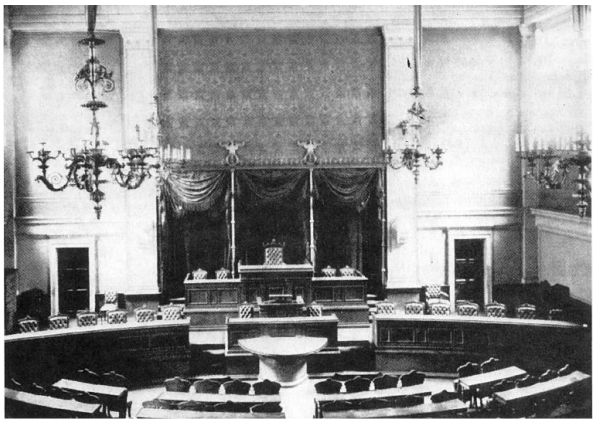
11 月革命の結末はエーベルト・ハーゼの SPD・USPD 政権の誕生であったが、USDP はすぐ離脱した（カーショー2015：第 4 章や世界大百科事典の「ドイツ革命」、東独の詳しい見方と多くの写真がある Hortzschansky 1978 など）。

11 月革命の最中〔11 月 11 日〕に、当時は USPD 党員であったスパルタクス・グループがアンハルト駅〔ベルリンの中央駅〕わきのホテル「エクセルシオール」に集まり、以下から成る「本部」（die Zentrale）を設立し、名前を〔組織らしく〕「スパルタクス同盟」（Spartakusbund）に変更した：

> 「ルクセンブルク、リープクネヒト、ヨギヘス、メーリンク、マイアー、H.ドゥンカー、K.ドゥンカー、レヴィ、ランゲ、タールハイマー、ピーク」、および「当日グダニスクに滞中のエバーライン」。（Weber 1993:29）。

スパルタクス同盟の本部と機関紙という体制が、1918 年 12 月 30 日から翌年元旦までの大会で創立された KPD に引き継がれ、名前も「KPD（スパルタクス同盟）」になった。

写真 1 KPD（スパルタクス同盟）創立大会会場



（出所）Hortzschansky (1978:270)

[2] ミュンツェンベルク（Willi Münzenberg、1889-1940）は青年時代にソ連共産党・コミンテルンからの独立を要求して挫折した。しかしその後レーニンの委託を活用しつつ、巨大発行部数を誇る「赤いコンツェルン」経営者として成功し、コミンテルン幹部の中で独立性の高い独特の地位を占め、ドイツ国会炎上事件（1933 年）被告ディミトロフらの無罪判決にも貢献した。スターリンと対立してコミンテルン失脚、KPD 除名。亡命中の南仏で「謎の死」（トロツキー暗殺の 2 ヵ月前）。彼の伴侶かつ共同経営者グロス（Babette Gross、1898-1990）も 1937 年 KPD と決別、亡命中に収容された南仏からメキシコへ逃亡し、1947 年西独へもどり 1949 年に FAZ（フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング）の共同創設者、1951 年まで経営管理部メンバーであった。

ノイマン（Heinz Neumann、1902-1937）は若くしてスターリンの気に入りとなり、その使徒、「鞭打ち人」として KPD 最高指導部に送り込まれ、指導的役割を果たすが、ナチ対策をめぐってスターリンと対立して失脚、その後逮捕・銃殺された。その妻マルガレーテ（Margarete Buber-Neumann、1901-1989）も逮捕され、スターリンの収容所からヒトラーのそれへ贈られたことが有名である。彼女は生き延びて戦後西独で多数の著作（邦訳多数）を残した。

ノイマンの親友グルジア人ロミナゼ（Bessarion (Besso) Lominadse、1897-1935）は、スターリンが後継者可能性のある 1 人と見なしたことがあった。しかし第 1 次五ヵ年計画と農業集団化を強行したスターリンに反旗を翻して追い詰められ、キーロフが殺された翌月（1935 年 1 月）に自殺した。

写真 2 ベルリンのプロイセン議会（上記大会を開催）

（注）1900 年時点。現在はベルリン州議会。（出所）（Gemeinfrei）
https://de.wikipedia.org/wiki/Preußisches_Abgeordnetenhaus#/media/Datei:Berlin_Abgeordnetenhaus_1900.jpg

表 1 KPD 党大会

	日付	場所	注または通称
第 1 回	1918.12.30-1919.01.01	ベルリン	創立大会
第 2 回	1919.10.22-23	ハイデルベルク、マンハイム他	非合法
第 3 回	1920.02.25-26	カールスルーエ、ドゥルラッハ	非合法
第 4 回	1920.04.14-15	ベルリン	非合法
第 5 回	1920.11.01-03	ベルリン	
第 6 回	1920.12.04-07	ベルリン	合同大会
第 7 回	1921.08.22-26	イェーナ	
第 8 回	1923.01.28-02.01	ライプチッヒ	
第 9 回	1924.04.07-10	オフェンバッハ、フランクフルト/M	非合法
第 10 回	1925.07.10-17	ベルリン	
第 11 回	1927.03.02-07	エッセン	
第 12 回	1929.06.08-15	ベルリン	ヴェディンク大会
第 13 回	1935.10.03-15	モスクワ近郊	ブリュッセル党協議会
第 14 回	1939.01.30-02.01	パリ南方の町	ベルン党協議会
第 15 回	1946.04.19-20	ベルリン	東独

表 2 KPD 党協議会

	日付	場所
第 1 回	1925.10.31-11.01	ベルリン
第 2 回	1928.11.03-04	ベルリン
第 3 回	1932.10.15-18	ベルリン

（表 1・2 出所）Weber（2008:1073）、Duhnke（1972:311, J464）、archivesportaleurope.ne.（注）日付は「年.月.日-（月」日」。第 10 回はドイツ連邦公文書館目録では 7 月 12-17 日である。「合同大会」は共産党への独立社会民主党左派の合流。

表 2 にはないが、創立 3 ヵ月後の 1919 年 3 月 29 日にフランクフルト（マイン）で「**全国協議会**」（Reichskonferenz）が開催され、幹部 60 人が出席した。そこでは「ストライキ行動と武装対立」、「反革命の殺害テロ」という情勢の中で、レヴィが本部の活動、ランゲがサンジカリズムやアナキズムとの共産主義の関係、タールハイマーが経営評議会運動について報告した（Hortzschansky 1978:386）。

3. コミンテルン世界大会・執行委員会総会

表 3 コミンテルン世界大会

第 1 回世界大会（創立）	1919. 3.2 - 3.6
第 2 回世界大会	1920. 7.19 - 8.7
第 3 回世界大会	1921. 6.22 - 7.12
第 4 回世界大会	1922. 6.5 - 7.5
第 5 回世界大会	1924. 6.17 - 7.8
第 6 回世界大会	1928. 7.17 - 9.1
第 7 回世界大会	1935. 7.25 - 8.21
解散	1943. 5.15

表 3a コミンテルン執行委員会（EKKI）総会

第 1 回拡大 EKKI 総会	1922. 2.24 - 3. 4
第 2 回拡大 EKKI 総会	1922. 6.7 – 6.11
第 3 回拡大 EKKI 総会	1923. 6.12 - 6.23
第 4 回拡大 EKKI 総会	1924. 7.12- 7.13
第 5 回拡大 EKKI 総会	1925. 3.21 - 4.6
第 6 回拡大 EKKI 総会	1926. 2.17 – 3.15
第 7 回拡大 EKKI 総会	1926. 11.22 - 12.16
第 8 回 EKKI 総会	1927. 5.18 - 5.30
第 9 回 EKKI 総会	1928. 2.9 - 2.25
第 10 回 EKKI 総会	1929. 7.3 - 7.19
第 11 回 EKKI 総会	1931. 3.26 - 4.11
第 12 回 EKKI 総会	1932. 8.27 - 9.15
第 13 回 EKKI 総会	1933. 11.28 - 12.12
解散	1943. 5.15

（表 3・3a 出所）富永（1997:viii）。

4. KPD 歴代最高幹部 59 人と指導幹部 1675 人およびその運命

表 4 戦前期 KPD 歴代最高幹部 59 人の在任期間と運命

氏名	姓	「本部」・「政治局」在任	除名または脱退	粛清・殺害
Anton Ackermann (1935-1939)	アッカーマン	1935-1939		
Karl Becker (1894-1942)	ベッカー	1923		ヒトラー
Paul Böttcher (1891-1975)	ベッチャー	1921-1923	1929 除名	
Heinrich Brandler (1881-1967)	ブランドラー	1919-1923	1929 除名	
Otto Brass (1875-1950)	ブラス	1920		
Bertha Braunthal (1887-1967)	ブラウンタール	1920		

Ernst Däumig (1866-1922)	ドイミク	1920	1921 脱退	
Franz Dahlem (1892-1981)	ダーレム	1928-1939		
Philipp Dengel (1888-1948)	デンゲル	1925-1929		
Hermann Duncker (1874-1960)	H. ドゥンカー	1919		
Käte Duncker (1871-1953)	K. ドゥンカー	1919		
Hugo Eberlein (1887-1941)	エバーライン	1919,1924,1927/28		スターリン
Gerhart Eisler (1897-1968)	アイスラー	1927/28		
Arthur Ewert (1890-1959)	エバート	1925-1929		
Ruth Fischer (1895-1961)	フィッシャー	1924/25	1926 除名	
Leopold Flieg (1893-1939)	フリーク	1927-1932		
Wilhelm Florin (1894-1944)	フローリン	1929-1939		
Ernst Friesland (Reuter)(1889-1953)	ロイター	1920/21	1921 除名	
Paul Frölich (1884-1953)	フレーリッヒ	1919/20	1928 除名	
Ottomar Geschke (1882-1957)	ゲシュケ	1925-1927		
Fritz Heckert (1884-1936)	ヘッカート	1927-1933		
Wilhelm Hein (1889-1958)	ハイン	1929-1933	1933 除名	
Edwin Hoernle (1883-1952)	ヘルンレ	1921-1923		
Leo Jogiches (1867-1919)	ヨギヘス	1919		殺害
Wilhelm Kasper (1892-1985)	カスパー	1929-1933		
Iwan Katz (1889-1956)	カッツ	1924/25	1926 除名	
August Kleine (1890-1960)	クライネ	1922/23	1924 疎遠	ソ連逮捕
Wilhelm Koenen (1886-1963)	ケーネン	1921-1924		
Paul Lange (1880-1951)	ランゲ	1919/20	1920 脱退	
Paul Levi (1883-1930)	レヴィ	1919/20	1921 除名	
Karl Liebknecht (1871-1919)	リープクネヒト	1919		殺害
Rosa Luxemburg (1871-1919)	ルクセンブルク	1919		殺害
Arkadi Maslow (1891-1941)	マスロウ	1924/25	1926 除名	スターリン(推測)
Paul Merker (1894-1969)	マーカー	1927-1930,1935		
Ernst Meyer (1887-1930)	マイアー	1919/21,1927-1929		
Heinz Neumann (1902-1937)	ノイマン	1928-1932		スターリン
Helene Overlach (1894-1983)	オファーラッハ	1929-1932		
Wilhelm Pieck (1876-1960)	ピーク	1919, 1927-1939		
Hermann Remmele (1880-1939)	レメレ	1920, 1924-1933		スターリン
Arthur Rosenberg (1889-1943)	ローゼンベルク	1924/25	1927 脱退	
John Schehr (1896-1934)	シェーア	1932/33		ヒトラー
Paul Schlecht (1882-1947?)	シュレヒト	1924/25	1927 除名	
Friedrich Schnellbacher (1884-1947)	シュネルバッハー	1920		
Ernst Schneller (1890-1944)	シュネラー	1925-1929		ヒトラー
Werner Scholem (1895-1940)	ショレム	1924/25	1926 除名	ヒトラー
Hermann Schubert (1886-1938)	シューベルト	1932-1935		スターリン
Max Schütz (1894-1961)	シュッツ	1924/25		
Fritz Schulte (1890-1943)	シュルテ	1929-1935		スターリン
Wilhelm Schwan (1884-1960)	シュヴァン	1925	1926 除名	
Walter Stoecker (1891-1939)	シュテッカー	1921, 1924		ヒトラー
Heinrich Süßkind (1895-1937)	ジュスキント	1927/28		スターリン
Ernst Thälmann (1886-1944)	テールマン	1924-1933	1928 除名	ヒトラー
August Thalheimer (1884-1948)	タールハイマー	1919-1923		
Walter Ulbricht (1893-1973)	ウルブリヒト	1929-1939		
Jacob Walcher (1887-1970)	ヴァルヒャー	1921-1923	1928 除名	
Herbert Wehner (1906-1990)	ヴェーナー	1935-1939	1942 除名	
Jean Winterich (1886-1931)	ヴィンターリッヒ	1929-1931		
Rosi Wolfstein (1888-1987)	ヴォルフシュタイン	(1920)	1929 除名	
Clara Zetkin (1857-1933)	ツェトキン	1919-1923		

（出所）Weber（2008:39ff.）（注）人名横の（）内は生年と没年。右端の「スターリン」「ヒトラー」は各々によるテロを指す。1920年最初の選出から1939年最後の選出までの政治局員・同候補47人と、KPDの「初期段階」考慮のため1919年党設立本部メンバー、独立社会民主党左派との合同前最後の、従って スパルタクス同盟出身だけの1920年4月〔正しくは11月〕の第5回党大会選出の同メンバー、

さらに1920年末〔12月〕の独立社会民主党左派との合同党大会書記8人を加えて、計59人を載せた(Weber(2008:37)。〔従ってKPDでは中央委員止まりのミュンツェンベルクはこのリストに無い。〕

表5 戦前KPD最高幹部59人の「社会的背景」

職業訓練修了労働者	13
職業訓練なし労働者	3
一般職員	11
手工業者・同労働者他	7
学者	12
教員	5
作家、「職業革命家」	6
技術者	2

(出所)Weber(2008:38)。

これら最高幹部 59 人は、党員全体や党幹部 1400 人(Weber(2008)の 2004 年初版所収人数)に比べて、職業訓練修了比率が「1/4」〔22%〕と少なく、他方一般職員と知的職業〔表 5 のうち学者から技術者まで〕の比率が著しく大きかった」。

また 59 人のうち 11 人は「1900 年以前に労働者運動に参加」、29 人は 1901～1914 年にドイツ社会民主党(SPD)に入り、その後いずれも KPD に移動した。

6 人は SPD 経由ではなく、ドイツ独立社会民主党(USPD)左派との合同〔1920 年 12 月〕以前の KPD に加入した。これらにはオーストリアやチェコスロバキアの共産党からの移動を含む。別の 7 人は SPD 経由ではなく直接 USPD に入り、KPD に移動した。

各時期の最高幹部を見ると、1918～1920 年には USDP 出身 18 人、スパルタクス同盟出身 21 人とほぼ均等であった。但し Weber(2008)所収の指導幹部全体では前者が優勢であった。

1923～24 年の党内対立では「16 人が左派、11 人が中間派、5 人が右派、残りは不確定」であった。それに続く「スターリン化の時期」には 5 人が左派に、3 人が極左反対派に、6 人が右派に加わり、23 人が除名された。除名理由は「左翼偏向」8 人、「右翼偏向」11 人、「その他」4 人であった。

第 2 次大戦終了時には 59 人中 25 人がすでに死亡、19 人が東独 SED に加わり(うち 7 人が粛清対象に)、4 人は西独 SPD に属し、残りは「他の政治グループ」ないしは不明である(Weber 2008:38)。

Weber(2008:10)は、同書が収録した「合計 1675 人のドイツの指導的共産主義者」〔KPD 以外も含む〕を**指導幹部**と呼んだ(最高幹部を含む)。その全体のうち「ヒトラーのテロ」による殺害が 256 人、「スターリンのテロ」による殺害が 208 人という「驚くべき事実」を指摘した〔両者合わせて 28%〕。

また共産主義者は〔ナチ政権下で〕1933-34 年に 6 万人、1935 年に 1.5 万人が逮捕された。SED の初期の歴史記述によると、1932 年の KPD 党員約 30 万人のうち約 15 万人が長期または短期に投獄された。

ナチ政権に殺害された共産主義者は最初の 2 年間に約 2 千人であり、終戦までには 2 万人に増えたと言われる。

ドイツからソ連に逃げた「指導的な政治的亡命者」のうち 2/3 以上が逮捕、拷問、投獄され、殆どが殺された。KPD 最高指導部・政治局の犠牲者はヒトラーによるよりもスターリンによるほうが多かった〔**表 4** では推測を除くと両者同数〕。

ヒトラー・スターリン協定〔独ソ不可侵条約・同秘密議定書〕後にはかなりの数のドイツ人が、〔独ソ秘密警察間の協定により〕ソ連からドイツに引き渡された〔スターリンからヒトラーへの贈呈〕。生き残った者は東独では体験について沈黙を強いられた。

〔ノイマンの妻は贈呈された 1 人であった。彼女はすぐ 1949 年初版の Buber-Neumann(1997)の後半に贈呈経緯を暴露し、ナチ収容所体験、終戦による釈放後のソ連占領地区から米軍占領地区(のちの西独の一部)をめざす冒険的脱出を記録した。彼女が「沈黙を強いられ」なかったのは西独に逃れ得たからであった。Leonhard(1989:87ff., J86-90)は彼女の贈呈経緯の要旨を紹介した。〕

約 1400 人の KPD 幹部(Weber 2008 の初版収録)のうち 222 人がナチ独裁の、178 人がスターリンの粛清の犠牲者となり、ほかに第 1 次大戦後の革命運動期の若干名の殺害やスペイン内乱での死亡があり、合計で「1/3 近くが暴力で亡くなった」。

これは「20 世紀のおぞましさを劇的に証明する破滅的に高い数字」である。その上彼らの家族(主に妻子)もひどい目に遭った。「囚人のぞっとする日常、残酷な拷問」はどちらの収容所にも当てはまった。

「元犠牲者のうちの若干」は第二次大戦後に「犯人」〔粛清対象〕にされたことが特徴的である」。すなわちいわゆるノエル・フィールド関連粛清事件(1950 年)が生じ、〔東独では〕クライケマイアー(Willi Kreikemeyer)が殺害された〔公式発表は自殺〕。(以上 Weber 2008:20f.,32f.)

〔ノエル・フィールド関連粛清事件はソ連による焚きつけのもとハンガリーが先行し(外相ライクら死刑 3 人、詳しくは盛田 2020)、チェコスロバキア(書記長スランスキーら 11 名処刑、詳しくはロンドン 1972)、ブルガリア(詳しくは沢田 1976)に続いて東独でも実施された(詳しくは青木 2022)。

東独の場合「階級敵〔フィールド〕を援助」したとされたのはクライケマイアーを含む 7 人で、うちすでに米国軍人と結婚した女性エリカ(Erica Glaser-Wallach、フィールドの「養女」ないし東独文書では「三角婚」)以外の 6 人が党を除名された。

7 人のうちバウアー(Leo Bauer)とエリカは東ベルリンのソ連軍事法廷で死刑判決を受け、ソ連に移送後ともに長期収容所送りに減刑され、1955 年ソ連と西独の捕虜送還協定により西独ないし西ベルリンへ送られ、その後エリカは米国へ、バウアーは西独首相ブラントの外交顧問になった。

残る 5 人のうち、クライケマイアーは公式には拘置所内での「自殺」とされたが、疑義があった。そのため妻(フランス人)が解明を試みたが、果たさなかった。2 人のみ東独の裁判で 10 年ないし 8 年の有罪になったが、1956 年までに釈放、すぐ無罪判決ないし名誉回復となり、それぞれ出版社勤務となった。うち 1 人は祖国功労賞を受賞した 1969 年に「精神的にも肉体的にもうちひしがれて死去」した。残る 2 人は地方企業への左遷のみで、その後 1 人は文化省の出版・検閲担当の 1 つの部長として中央に復帰した。以上の 7 人のほかに 4 人が職務罷免処分となったが、彼らは引き続き「同志」として扱われた(青木 2022:3 節,4 節)。

従って「自殺」と非業の死が各 1 人であったが、東独裁判所による死刑判決はなく、また実際に死刑になった者もい

ない。なお、のちの東独シュタジ偵察本部長マルクス・ヴォルフが 7 人のうち 2 人の摘発に活躍し、それを自らの履歴書で自慢した（青木 2022:5）。〕

5. KPD の「地区」組織

KPD 創立大会提案の規約案には「結集」単位として「諸経済領域」とともに都市周辺（**表 6**、カッコ内の都市周辺）について 22 地区（Bezirk）が設定された：

表 6 KPD 最初の都市周辺地区

ブランデンブルク（ベルリン）	ハノーバー（ハノーバー）
ポメルン（シュチェチン）	北部（ハンブルク）
東・西プロイセン（ケーニヒスベルク）	メクレンブルク（リューベック）
シレジア（ブレスラウ）	北西部（ブレーメン）
オーバーシレジア（ボイテン）	東ヴェストファーレン（ビーレフェルト）
ニーダーライジッツ（コットブス）	ヴェストファーレン（エッセン）
東ザクセン（ドレスデン）	ヘッセン（ハーナウ）
エルツ山地・フォークトラント（ケムニッツ）	バーデン（マンハイム）
中部ドイツ（ライプチッヒ）	ヴュルテンベルク（シュツットガルト）
ザクセン・アンハルト（マグデブルク）	ニーダーバイエルン（ニューールンベルク）
チューリンゲン（エアフルト）	オーバーバイエルン（ミュンヘン）

（出所）Weber（1993:307,309）

その後 KPD には以下の地区組織が存在した：

表 6a KPD 地区組織

	1923 年	1929 年	
1	Berlin-Brandenburg	Berlin-Brandenburg	ベルリン・ブランデンブルク
2	Lausitz		ラウジッツ
3	Pommern	Pommern	ポンメルン
4	Ostpreußen	Ostpreußen	東プロイセン
5	Danzig	Danzig	ダンチッヒ〔現グダニスク〕
6	Schlesien	Schlesien	シレジア
7	Ostsachsen	Oberschlesien	オーバーシレジア
8		Ostsachsen	東ザクセン
9	Erzgebirge-Vogtland	Erzgebirge-Vogtland	エルツ山地・フォークトラント
10	Westsachsen	Westsachsen	西ザクセン
12	Halle-Merseburg	Halle-Merseburg	ハレ・メルゼブルク
13	Magdeburg-Anhalt	Magdeburg-Anhalt	マグデブルク・アンハルト
14	Thüringen	Thüringen	チューリンゲン
15	Niedersachsen	Niedersachsen	ニーダーザクセン
16	Mecklenburg	Mecklenburg	メクレンブルク
17	Wasserkante	Wasserkante	ヴァッサーカンテ
18	Nordwest	Nordwest	北西部
19	Rheinland-Nord	Ruhr	ルール
20	Rheinland-Süd	Niederrhein	ニーダーライン
22	Mittelrhein	Mittelrhein	中部ライン
23	Hessen-Waldeck	Hessen-Kassel	ヘッセン・ヴァルデック。同・カッセル
24	Hessen-Frankfurt	Hessen-Frankfurt	ヘッセン・フランクフルト
25	Baden	Baden	バーデン
26	Pfalz	Pfalz	プファルツ
27		Saar	ザール
28	Württemberg	Württemberg	ヴュルテンベルク
29	Nordbayern	Nordbayern	北バイエルン
30	Südbayern.	Südbayern	南バイエルン
	計 26 地区	計 27 地区	

（出所）Weber（1969:261）。
（注）シレジアとダンチッヒは現ポーランド領。ラウジッツはコットブスやバウツェンなどの都市がある現ドイツ東端地区、ヴァッサーカンテは「沿岸」を意味し、北海沿岸地区を指す。

トイツ連邦公文書館 KPD 目録には「Bezirk Rheinland-Westfalen Süd und Nord」もある。また同目録には「Landesvorstand Sachsen」や「Landesleitung Bayern」の文書もあり、州指導部が存在した。

日本共産党も「職場、地域、学園につくられる支部を基礎とし、基本的には、支部―地区―都道府県―中央という形で組織される」（https://www.jcp.or.jp/web_jcp/html/Kiyaku/index.html）。

なお、東独政府は行政区画として州を廃止して県（Bezirk）制度とし 16 県に分割した（うち東ベルリンは「東」を外して「DDR 首都ベルリン」と呼んだが、SED では他県同様に県指導部であった）。両独統一後に県を廃止、州制度（Land）に復帰した。

表 6b KPD 各地区の党員比重と人口比重の対比
（全国=100%。1929 年党員比重の高い順）

地区	党員の地区別比重（%）		人口の地区別比重(%)
年	1929	1931	1929
ベルリン・ブランデンブルク	15.8	15.7	10.5
ハレ・メルゼブルク	9.0	7.0	2.4
ヴァッサーカンテ	8.9	8.9	4.8
ニーダーライン	7.8	6.3	5.4
エルツ山地・フォークトラント	7.5	--	2.8
ルール	6.7	9.0	7.1
西ザクセン	6.1	13.8*	2.0
チューリンゲン	4.7	3.7	3.2
ヘッセン・フランクフルト	3.6	4.4**	4.2
東ザクセン	3.4	--	2.9
マグデブルク・アンハルト	2.5	2.4	2.6
中部ライン	2.4	3.4	5.2
北西部	2.3	2.3	2.5
ヴュルテンベルク	2.2	2.3	4.0
北バイエルン	2.2	2.0	5.0
東プロイセン	1.9	2.6	3.5
バーデン	1.8	2.8 ***	3.5
シレジア	1.5	2.7	5.0
ニーダーザクセン	1.5	2.5	5.3

ダンチッヒ	1.4	1.1	0.7
ポンメルン	1.3	2.1	3.4
南バイエルン	1.2	1.9	5.2
ザール	1.0	0.7	1.2
プファルツ	0.8	--	1.5
オーバーシレジア	0.8	1.0	2.3
メクレンブルク	0.7	1.2	1.5
ヘッセン・カッセル	0.6	0.5	1.8

(出所)Weber(1969:367f.)
(原注)各地区党員数比重は米国国立公文書館所蔵のナチ SS・ゲシュタポ文書の中の KPD 公式数字による。1931 年には「若干の地区が統合された」〔そのため「--」には数字がない。〕
(注)*:「ザクセン」と表記。**:「ヘッセン」と表記。***:プファルツと統合。エルツ山地はザクセン地区に統合だろうが、フォークトラントはザクセン、バイエルン、チューリンゲンにまたがるのでどのように統合されたか分らない。各集計数字は四捨五入の関係で100%前後である。

6. KPD 政治局

KPD は下記のように 1920 年から政治局を設置した。その際 1929 年第 12 回党大会まで「Polbüro」と称したが、同党大会の「あとにすぐに Politbüro」に変更した(Weber 1969 Bd.2:7)。両者は同義なのでともに政治局と表記する。

6.1. 小史

KPD は 1920 年から政治局を設置したが、ドイツ語表記は当初 Polbüro、その後 Politbüro になった(意味は同じ)。政治局員・同候補ほかの名簿は **6.3 節**に掲載する。

ドイツ公文書館所蔵の KPD 政治局文書からまとめた政治局小史(archivesportaleurope.net)によると:

政治局はコミンテルン第 2 回世界大会(1920 年 7-8 月)決定に基づく組織再編(1920 年 8 月)によって形成された。

〔村田(1978)所収の第 2 回世界大会資料には政治局形成関連はない。同書所収の第 3 回世界大会資料のうち「共産党の組織建設、その活動の方法と内容についてのテーゼ」(1921 年 7 月 12 日=最終日)の第 47 テーゼが、「小指導部」(政治局と組織局)は党大会が、または党大会の委任があれば、中央指導部(中央委員会または拡大中央委)が選出すると定めた(同書:463)。下記のように KPD は組織局も設置した。〕

1922 年「中央党機構の新規設置に伴い政治書記局(Polsekretariat)が形成され」、まずポール(Käthe Pohl)が、同年 5 月からブランドラー、その後シュテッカーやフィール(Wilhelm Firl)が率いた。

「1923 年の政治的諸条件〔特にハンブルクでの KPD10 月蜂起失敗〕が非合法化への準備を必要とし」、同年 11 月 3 日中央委員会が政治局と組織局、監査委員会の解散、6 人から成る幹部会選出、本部の諮問委員会への変更を決定した。

第 9 回党大会(1924 年 4 月 7 日-10 日)後にはマスロウが、同年 6 月からはフィッシャーが政治局を率いた。

〔この左派夫婦の指導権は第 10 回党大会(1925 年 7 月)でも存続したが、同年夏のコミンテルンからの KPD への公開書簡による攻撃により失脚。早期失脚でスターリン粛清を免れたが、**表 4** はスターリンのマスロウ暗殺を推測。ミュンツェンベルクについても同様の推測が強い。〕

第 1 回党協議会(1925 年 10 月 31 日-11 月 1 日)がフィッシャー・マスロウのグループを党指導部から排除し、〔コミンテルン忠誠左派から成る〕新政治局が形成された(メンバーは **6.3.節**参照)。

1927 年 3 月～1928 年 10 月には書記局と並んで「政治局付置の政治書記局」が存在した〔とあるが、**6.3.節**のように 1929 年にも存在した〕。

1933 年 1 月末のヒトラー政権成立直後に KPD は非合法化され、指導部の一部が亡命し、同年 5 月 25 日から同年末までダーレム、フローリン、ピークがパリで政治局の「外国委員会」(Auslandskomitee)を形成した。これは「外国指導部」(Auslandsleitung)とも呼ばれた。

表 7 ヒトラーの首相任命からナチ独裁完成へ(1933 年)

1 月 30 日	大統領がヒトラーを首相に任命
2 月 2 日	KPD 本部「リープクネヒトハウス」を政治警察が占拠・捜索、共産党のデモ禁止
2 月 26-27 日	機関紙「赤旗」最終号、以後非合法
2 月 27 日	夜に国会議事堂炎上〔議事堂内で逮捕されたルベ(van Lubbe)が共産党党員手帳所持と発表*〕。〔現場の将校の共産党の陰謀に違いないという発言をゲーリンクもヒトラーも信じその撲滅を命じた**〕。党員逮捕開始
2 月 28 日	大統領が緊急令発布し憲法〔の一部*〕を停止。〔KPD と SPD の新聞発禁。KPD 国会議員団長トーグラーが任意出頭*。〕
3 月 3 日	テールマン逮捕(1944 年 8 月 18 日ブッヘンヴァルト収容所で殺害)
3 月 5 日	国会選挙。KPD 獲得の 81 議席は資格拒否される。〔選挙結果は**表 8**〕
3 月 9 日	国会放火容疑でディミトロフらブルガリア人 3 人逮捕。〔ディミトロフがルベと同席を見たとのナチ党給仕の密告による*。〕
5 月 2 日	労働組合禁止
5 月 10 日	ナチによる 4 万冊焚書
6 月 22 日	SPD の政治活動禁止
7 月 14 日	政党新設禁止法発布。ナチ独裁制度完成

(出所)フレヒトハイム(1971:訳者作成の付録年表)から作成。但し*:ディミトロフ(1955:2)。**:カーショー(2016 上:478-9)。

国内では「政治局の国内指導部」(Inlandsleitung)を責任者シェーアとシューベルト、シュルテ、ウルブリヒトが構成し、「非合法闘争」を指導し、「非合法体制への転換」に責任を負った。

その後ウルブリヒト、シューベルト、シュルテがパリへ去ったあと、1933 年 10 月末に新たな国内機関である「非合法国内指導部」が形成され、1935 年春まで活動した。その下に複数の大地区(Oberbezirke)が設置され、「1934 年頃」まで存続した。大地区それぞれには従来の地区(Bezirk)が複数所属した。

1934 年 1 月～1935 年 1 月に政治局ではピークやダーレム、フローリン、ウルブリヒト、シューベルト、シュルテがパリから党活動を指導した。政治局は 1934 年 8 月に非合法の国境機構を設置、その各国境拠点(Grenzstützpunkte、**10 節**では Grenzstelle)の「指導と統制」を政治局員が分

担した〔これが地域指導部に発展する（**10 節**）〕。

1935 年 1 月中央委員会後、政治局員ピーク、フローリン、ヘッカート、シューベルト、シュルテがモスクワに留まることになり、政治局の拠点はパリからモスクワに移った。ダーレムとウルブリヒトは「政治局作戦グループ」を形成し、非合法党組織指導のため 1935 年 2 月始めプラハに移った。

ブリュッセル党協議会（1935 年 10 月 3-5 日）後の政治局員（**6.2.4.節**参照、名簿は**6.3.節**）の中ではテールマンがナチによる収容中のためピークが議長となった。

1935 年 10 月半ば以後は政治局に「外国作戦指導部」が存在し、1936 年 9 月までプラハから、その後 1939 年 9 月までパリから指揮した。同指導部には「主にダーレム、マーカー、ウルブリヒト、アッカーマン、ヴェーナーが属した」。

1939 年 12 月ストックホルムに「メヴィス（Karl Mewis）、ヴィアトレック（Heinrich Wiatrek）、ヴェーナー、シュタールマン（Richard Stahlmann）」から成る外国指導部が設置され、1942 年まで存在した。

またブリュッセル党協議会後、ドイツ隣接諸国における「地域指導部」（**表 9**）が非合法党組織の支援と指導のために作戦指導機関として形成された。諸地域指導部はたいてい第 2 次世界大戦勃発まで存在した。

1935 年にゲンチュ（Erich Gentsch）を責任者とする 3 人の「中央亡命指導部」（Zentrale Emigrationsleitung）がプラハに設置され、「臨時救援組織」として活動したが、地域指導部に吸収された。

政治局は「特定課題のために短期間のみ」作業委員会を設置することがあった。例えば：

・政治委員会（Politische Kommission、1925-1926 年）

・国会・大統領・プロイセン議会選挙準備委員会（Kommission zur Vorbereitung der Reichstags-, Reichspräsidentschafts- und Preußenwahlen、1928・1932 年）

・歴史委員会（Geschichtskommission、1920-1928・1933-1934・1935-1941 年）

・農業委員会（Agrarkommission）

・反テロ委員会（Anti-Terror-Kommission、1933-138 年）

・中堅幹部小委員会（Kleine Kaderkommission）

6.2. 主要選出時期の最高指導部の特徴

1919 年 KPD 発足時、1924 年左傾の時、1929 年スターリン化完成の時、1935 年亡命時の最高指導部の構成の特徴は以下のようであった（Weber 2008:42ff.）。

6.2.1 1919 年最高指導部（10 年後に残るのは 1 人）

KPD 創立大会〔1918 年 12 月 30 日-1919 年 1 月 1 日〕選出の「本部」員 12 人（**写真 1**）の平均年令は 41 才、最高ヨギヘス 52 才、最年少マイアー32 才であった。

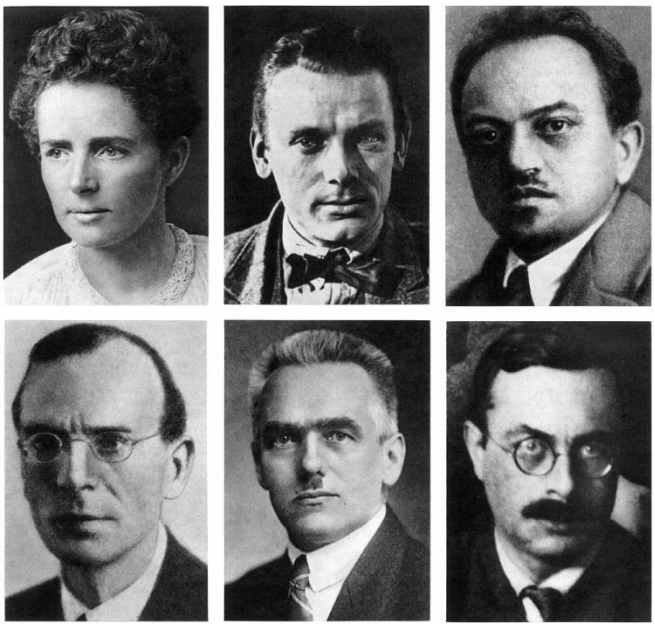
うち 8 人が学者（うち 5 人は博士）、3 人が一般職員、1 人が手工業労働者ピークであった。男性が 10 人、女性は K.ドゥンカーとローザ・ルクセンブルクの 2 人であった。

12 人のうち 3 人（ローザ、リープクネヒト、ヨギヘス）は 1919 年 1 月に殺害された〔実際はローザとリープクネヒトは 1 月 15 日連行先で（詳しくは Hortzschansky 1978:309ff.やフレーリヒ 1991：354-8 など）、ヨギヘスは 3 月 10 日逮捕先の独房で殺害（Weber 2008:419）。〕。1921 年までに 2 人（レヴィとランゲ）が党を離れた〔前者は除名、後者は戦後 SED に加入、ライプチッヒ人民新聞編集に従事〕。残る 7 人は 1923～24 年の党内対立で 2 人が右派、5 人は中間派に就き、左派はゼロであった。

結局死亡、除名、離反などで 10 年後の「1929 年には KPD における重要な役割を果たしたのはただ 1 人（ピーク）のみであった。

写真 3 創立大会選出「KPD 指導機関」〔本部〕の 12 人

上：Karl Liebknecht, Rosa Luxemburg, Hermann Duncker, Leo Jogiches, Paul Lange, Paul Levi
下：Käte Duncker, Hugo Eberlein, Paul Frölich, Ernst Meyer, Wilhelm Pieck, August Thalheimer



（出所）Hortzschansky (1978:284f.)。（注）Weber（1969 Bd.2：末尾）に KPD 幹部 164 人の顔写真がある。

6.2.2. 1924 年の政治局（劇的左転換）

KPD は 1924 年に「劇的な左転換」し、政治局も大きく変化した。政治局員 9 人（名簿は **6.3.節**）の平均年令は 35 才、レメレ 44 才が最年長、フィッシャー29 才が最年少であった。〔最年少かつ女性のフィッシャーがリーダーとなった〕。

その内訳は職業訓練修了労働者 3 人、同無し労働者 1 人、学者 3 人、大学中退 2 人であった。独立社会民主党（USPD）出身が 6 人、2/3 を占めた。前年の党内対立では

8 人が左派、1 人が中間派に属した。

労働者運動との関わりは 20 年以上が 1 人のみ、10～20 年が 4 人、KPD(合同前)と USPD の出身が 2 人ずつであり、党の専従経験は 20 年以上 1 人、2～5 年 7 人、1 年 1 人であった。

KPD の「スターリン化」の進展により、9 人のうち 7 人が除名ないし離党となり、党に残ったのはテールマンとレメレのみであった。〔この政治局は、ジノヴィエフ支持のフィッシャーと夫マスロウのスターリンへの抵抗むなしく、スターリンのコミンテルン経由の攻撃により短命に終わった〕。

その後テールマンはヒトラー・テロで、レメレはスターリン・テロで殺された。ほかに 1945 年までに 4 人死亡し、戦後に生き残り SED に参加したのはシュッツのみであった。

〔しかしシュッツは 1950 年 SED 除名され、西ベルリンへ逃亡・移住した(Weber 2008:839)。だから 9 人のうち東独で活躍した者はいない。〕

6.2.3. 1929 年の政治局(スターリン化政治局)

1929 年の政治局は 1924 年のそれに比べて「スターリン化」による「著しい変化」を反映した。

1924 年の政治局員のうちレメレとテールマンのみが 1929 年の政治局に残った。政治局員 11 人、同候補 4 人と、15 人に増加し、平均年令 38 才、最年長は再びレメレ 49 才、最年少はノイマン 27 才であった(名簿は **6.3 節**)。

〔この政治局を主導したのはミュンツェンベルクの義弟ノイマン(当時はスターリンのための鞭打ち人と揶揄された)とレメレであったが、次第に彼らのナチ対決方針がスターリンと対立し、粛清された。〕

15 人の経歴は「知識人はほぼ完全に排除」、職業教育修了労働者 6 人、同無し労働者 2 人、一般職員 3 人、手工業就業・ウェイター・教師・職業革命家各 1 人であった。

党専従期間は「著しく長期」となり、「20 年以上 1 人、10～20 年 5 人、5～10 年 8 人、2 年 1 人」であり、「労働者運動」経験は「20 年以上」4 人、「10～20 年」5 人であった〔期間区分に重複表示がある〕。

「1923-24 年の〔党内〕対立」では「6 人が左派、7 人が中間派に属し、2 人〔ダーレムとウルブリヒト〕が党機構幹部〔党官僚〕として“中立”であった」。

スターリン化した政治局には当初「反対派」はいなかったが、「のちに 5 人がマーカーのグループまたはノイマンのグループに加わった」。

15 人のうちテールマンがヒトラーの、フリーク、ノイマン、レメレ、シュルテの 4 人がスターリンの犠牲になった。

大戦末期までに合計 8 人が死亡、2 人が離党し、大戦後東独「SED 指導部に坐った」のは「ダーレム、マーカー、オファーラッハ、ピーク、ウルブリヒト」の 5 人のみであった。

6.2.4. 1935 年の政治局

KPD の「ブリュッセル党協議会」〔実際はモスクワ近郊で開催された第 13 回党大会〕が選出した「非合法政治局」は、ナチ収容所にいるテールマンを含む 8 人のみで、平均年令 42 才、最年長はピーク 59 才、最年少はヴェーナー29 才〔のちに西独 SPD 幹部〕であった(名簿は **6.3.節**)。

経歴は職業訓練修了労働者 4 人、同未修了労働者 1 人、一般職員 3 人であった。

「若い政治局員候補」アッカーマンとヴェーナー」は 1926 年ないし 1927 年入党で、1920 年代の党内対立に関係が無かった。マーカーは 1930 年に罷免を経験したが、残る 5 人は「1933 年まで常に党の路線を支持した」。

6.3. 政治局員等名簿(1924-1939)

出所は①archivesportaleurope.net、②Weber(1969, Bd.2:12, Bd.1:118)、③Duhnke(1972:185, J 上 268; 312, J 下 465)で、小見出し末尾に番号を記載する。

●1920 年 8 月最初の政治局員(①):

August Thalheimer(議長), Paul Levi, Clara Zetkin, Ernst Meyer, Heinrich Brandler.

●1921 年 8 月党大会後選出政治局員(①):

Ernst Meyer(議長), Paul Böttcher, Fritz Heckert, Edwin Hoernle, Jacob Walcher, August Thalheimer, Clara Zetkin.

●1923 年 2 月選出政治局員(①):

Heinricht Brandler(議長), Arthur Ewert, Karl Becker, Wilhelm Koenen, August Thalheimer.

●1924 半ば「本部」任命(②):

政治局(Polbüro):Ruth Fischer, Iwan Katz, Arkadij Maslow, Hermann Remmele, Arthur Rosenberg, Paul Schlecht, Werner Scholem, Max Schütz, Ernst Thälmann.

政治書記局(Politsekretariat):Ruth Fischer, Arkadij Maslow, Werner Scholem

●1925 年 7 月第 10 回党大会選出(②):

政治局:Ruth Fischer, Philipp Dengel, Ottomar Geschke, Arkadij Maslow, Hermann Remmele, Paul Schlecht, Ernst Schneller, Werner Scholem, Ernst Thälmann

●1925 年 11 月第 1 回党協議会後選出(①):

政治局:Ernst Thälmann(議長), Konrad Blenkle, Philipp Dengel, Arthur Ewert, Ottomar Geschke, Fritz Heckert, Hermann Remmele, Ernst Schneller, Wilhelm Schwan.

●1927 年 3 月第 11 回党大会選出(②):

政治局:Ernst Thälmann(議長), Philipp Dengel, Hugo Eberlein, Arthur Ewert, Fritz Heckert, Paul Merker, Ernst Meyer, Hermann Remmele, Ernst Schneller

同候補:Gerhart Eisler, Wilhelm Pieck, Heinrich Süßkind

政治局書記:Leo Flieg

政治書記局:Philipp Dengel, Arthur Ewert, Ernst Meyer, Ernst Thälmann

〔①によると、Konrad Blenkle と W. Pieck も政治局員である。H. Eberlein は Wilhelm Hein、Walter Ulbricht とともに同候補であり、上記にある 3 人とは全く異なる。また政治書記局員 4 人のうちには E. Meyer ではなく、E. Schneller が入った。〕

●1929 年 6 月第 12 回党大会後選出(②):

政治局:Ernst Thälmann(議長), Franz Dahlem, Leo Flieg(書記), Wilhelm Florin, Fritz Heckert, Paul Merker, Wilhelm Pieck, Hermann Remmele, Fritz Schulte, Walter Ulbricht, Jean Winterich.〔①も同じ〕

同候補：Wilhelm Hein, Wilhelm Kasper, Heinz Neumann, Helene Overlach.〔①も同じ〕

政治書記局：Ernst Thälmann, Hermann Remmele, Heinz Neumann.

●1932 年 5 月中央委員会による追加選出（①）：

政治局：John Schehr, Hermann Schubert。後者は〔1929 年候補選出の〕H. Overlach の代わり。

同候補：Leo Flieg

●1935 年 10 月ブリュッセル党協議会後選出（③）：

政治局：Ernst Thälmann（ナチが収容中）, Wilhelm Pieck（党議長）, Wilhelm Florin, Fritz Heckert, Walter Ulbricht, Franz Dahlem, Paul Merker.

同候補：Herbert Wehner, Anton Ackermann.〔以上①も同じ〕

政治局作戦指導部（非合法組織指導担当）：Anton Ackermann, Franz Dahlem, Paul Merker, Walter Ulbricht, Herbert Wehner.

統制委員会：Philipp Daub, Adolf Deter, Wilhelm Koenen, Siegfried Rädel, Sepp Schwab, Hermann Nuding.

「ピークが党議長に選ばれたが、権力の重心は明らかに作戦指導部にあり、そこでの筆頭はウルブリヒトであった。ダーレムもある意味でトップポジションの候補者に該当し得た」。ヴェーナーとアッカーマンが「ドイツ国内の非合法活動出身」の新顔であったが、中央委員会は非合法出身によって「非常に強く占められた」。

●1939 年ベルン党協議会選出（③）：

政治局：Ernst Thälmann（ナチ収容所）, Wilhelm Pieck（議長）, Franz Dahlem, Wilhelm Florin, Paul Merker, Walter Ulbricht.

書記局（パリ）員：Franz Dahlem, Paul Merker, Gerhart Eisler (?), Alexander Abusch (?)

7. KPD 内の分派

KPD 内では 1930 年代初めまで右派・左派・極左派・宥和派が攻防を繰り返し、さらにそれらと区別される党機構派〔党官僚派〕が存在した。

1926 年 2 月 17 日-3 月 15 日のコミンテルン拡大執行委員会において議長ジノヴィエフが「KPD 内の諸潮流」を 3 分類し、各影響範囲を左派 80-85%、右派 3-5%、各種極左派合計約 10%と評価した。これは「全く大雑把」な数字だが、「1920 年代に KPD に存在していた諸グループのヒント」になる（Weber 1969,Bd.1:16; Weber 2008:23）。

これらの数字はブランドラーら右派失脚後の数字である。

「その時々の支配的分派を公然と支持」する幹部や、「分派闘争に巻き込まれないようにれないように努力」する幹部もいた。後者に「特に当てはまる」のは、すでに「決定的な権力の座」にあるが主に「舞台裏で働いた機構運営者たち（ウルブリヒト、ダーレム）」であった（Weber 2008: 26）。

ボリシェビキ化（レーニン化）、特に極端にはスターリン化においては「分派」（Faktion、派閥とも）は除名、さらには粛清の対象となった。おそらく暴力革命主義の政党が軍隊的規律を採用し、規律がトップの支配手段化した。

しかし本来政党内には基本理念の一致の枠内でも具体的な政策、戦略、戦術では幅広い意見分布があり得るし、それらの間の論争（党内異論の自由）こそが政党の発展力の源泉のはずである。KPD 創始者ローザ・ルクセンブルクは「政治的自由の持つ教導力と治癒力，浄化力のすべて」は「異論の自由」にこそあると強調した（Luxemburg 1918: 359, J41、青木 2016:161）。

現に KPD の初期には党内異論の自由が明確であった（**7.6 節**参照）。しかしそれは早期に消え、議論はソ連共産党トップの直接指示、またはコミンテルンを通じた指示による決着と反対派の排除・粛清に変質した。

KPD は仇敵ヒトラーとのスターリンの同盟締結にさえ異論を唱えなかった。公然とスターリンを「裏切り者」と糾弾したのはミュンツェンベルクのみであった。党内でナチとの対決方針を主導したノイマンとレメレはすでに粛清されていた。

以下は Weber（1969,Bd.1:16ff.）と Weber（2008:23ff.）にある各分派の説明の要約である。

7.1. 右派（die Rechten）

右派指導者はブランドラー（1922-1923 年に KPD リーダー）、タールハイマー〔のちに左派指導者となる若きノイマンの才能に最初に着目〕、ヴァルヒャー、フレーリッヒら。

「特定の行動目標や労働者の状況改善」のための SPD との統一戦線を是認し、「自由労働組合」〔SPD 系労組〕への協力や「積極的議会活動」などに賛成であった。

主力はスパルタクス同盟出身であり、「“レーニン主義”と“ルクセンブルク主義”の総合」の立場を取り、第 1 次大戦前の「社会民主主義左派の伝統を継承した」。

〔「ルクセンブルク主義」のレニン主義との違いを象徴するのは、**1 節**でも触れたように「異論の自由」の必要性・重要性の強調によるレーニン批判であった（青木 2016）。

右派はスターリンの「主導的的地位」を「ソビエト・ロシア」内については認めたが、コミンテルンにおいては拒否し、またトロツキーとジノヴィエフにも反対した。〔対照的に左派指導者フィッシャー・マスロウ夫妻は反スターリン、ジノヴィエフ支持であった。〕

KPD 内での主な右派支持者は「有資格労働者や労組幹部、地方自治体幹部等々」であり、知識人は殆どいなかった。地域的拠点はザクセン州とチューリンゲン州、シュトゥットガルトなど若干の都市であった。

1923 年 KPD の 10 月蜂起の失敗後に殆どの幹部が失脚し〔KPD の左傾化になっ〕た。1928-1929 年にほぼ全員が KPD を去るか除名され、KPO（ドイツ共産党（反対派））を設立し、4000 人以上が登録した。

7.2. 中間派（Die Mittelgruppe）・宥和派（die Versöhnler）

〔10 月蜂起失敗後の〕1924 年初めの KPD 指導部分裂の際に多数が右派から離れて**中間派**を形成し、当時「党員の約 1/4」の支持を得た。

1924 年夏の左派勝利（フィッシャー中心の指導部形成）後、中間派の一部（レメレやシュネラー、ケーネンら）が左派に移り、残りはフィッシャー指導部に反対した。〔しかしフィッシャーは夫マスロウとともにスターリン・コミンテルン支配に抵抗して翌年失脚する。〕

フィッシャーらの失脚（1925 年夏）後、残存中間派（1927 年から**宥和派**と呼ばれる）は 1926-1928 年に、左派のうちのテールマンらコミンテルン〔=スターリン〕忠誠派と提携し

て KPD 指導部に入った。その中心はマイアー[3]であった。。

宥和派にはマイアーのほかにエヴァート、エバーライン、アイスラー、シューマン(Georg Schumann)らがいた。

彼らは「レーニン主義的」であり、ほぼ右派同様に、「共産主義的現実政策」、つまり「SPD との統一戦線や積極的な労働組合活動・議会活動」を肯定した。しかし右派と異なり、「ソ連共産党の指導的役割を断固支持」し、またあくまで「KPD 内に留まるために尽力」し、「党の分裂は問題外であった」。

〔Weber は右派との差異を「微妙な差異のみ」とするが、ソ連共産党支配容認は重要な差異の 1 つであった。〕

ソ連共産党からの彼らの支援者は「主にブハーリン」であった。宥和派は主に知識人と職業革命家〔専従幹部〕に支えられた。地域としては「ハレ=メルゼブルクや西ザクセン、ハンブルク」に支持者が多かった。

マイアーの死後エヴァートら指導部は中央委〔コミンテルン忠誠左派〕に「降服した」が、「残りは KPD 内で非合法に引き続き活動した」。

7.3. 左派(Die Linken)

「KPD を共同設立した急進的な左派(die radikalen Linken)」は 1920 年除名され、極左の KAPD(ドイツ共産主義労働者党)を設立した。

しかしその後「急速に新たな左派が生まれ」、その多くは独立社会民主党(USDP)から 1920 年 12 月に KPD に移った党員であった。

彼らは 1921-1922 年のマイアー(中間派)主導の、1922-1923 年のブランドラー(右派)主導の指導部に反対し、すでに 1923 年に重要工業地区(ベルリン、ヴァッサーカンテ、ライン中部)で過半数を占め、1924 年には「党員のほぼ 3/4」が左派支持であった。

フィッシャー、マスロウ、テールマンらを中心とする左派は「1924 年党内権力を握った」。その結果 KPD は「より先鋭的な方針」に変化した。

左派は「観念的・急進的な傾向」を代表し、「最終目的」を優先し、「過渡的な諸要求」や SPD との統一戦線を拒否し、「部分的には労働組合の分裂を勧め、議会では議事進行の妨害をした」[4]。彼らは「暴力的蜂起」のつもりであり、党の「ボリシェビキ化を支持した」。

「急進化した労働者」、特に〔大量発生した〕失業者が左派を支持し「1924 年半ばからすべての地区で優勢であった」。〔「地区」は KPD の地方組織である(**5 節**参照)。〕

しかし左派の「ウルトララディカルな政策と現実の間の矛盾が KPD を危機に突き落とした」。そのため 1925 年春、左派内の多数派が「より現実的な戦術」を選んだ。それに反対したショレムらが分離して極左派を形成した。

残った左派多数派はさらに 1925 年夏・秋に「コミンテルンの圧力」〔その象徴が同年 8 月 KPD 全党員に宛てた「公開書簡」〕により、「コミンテルンに忠実」なグループ(テールマンら)と、圧力への抵抗グループ(フィッシャーやマスロウ、シュレヒト、その支持者ら)に分裂した。

前者が多数派として党指導部を握り、「**ドイツのスターリン派**」になった。後者は職務を罷免され、〔フィッシャーが言うにはコミンテルンへの抵抗のため〕ジノヴィエフに同調して左派内の反対派を形成したが、1926-1927 年に多くが離党ないし除名となった。

前者の中にも、「ケムニッツ左派」(1927 年)や「マーカー・グループ」(1930 年)、「レメレ・ノイマン反対派」(1932 年)が生じたが、いずれも党中央に「すぐ降伏」し〔またはレメレ・ノイマンは粛清され〕、支持者は党内に留まった。

〔スターリンはテールマン指導部強化のために気に入りのノイマンを送り込み、彼がレメレとともに指導権を握ったが、2 人はナチ対策でスターリンと対立し失脚、粛清された。〕

7.4. 極左派(Die Ultralinken)

極左派は 1925 年春に KPD の「指導的地位の知識人たち」と、プファルツや西ザクセン、ベルリン・ヴェディンク区の労働者代表(いわゆるヴェディンク反対派)が、「フィッシャー・マスロウ・テールマン指導部の右傾化」に反対して形成し、「古い急進左派の立場に固執した」。

知識人の中心はショレムやローゼンベルク、I. カッツ、またコルシュ(Karl Korsch)、シュヴァルツ(Ernst Schwarz)、ノイバウアー(Theodor Neubauer)であった。ヴェディンク反対派の中心は Ha.ヴェーバー(Hans Weber)やフォークト(Arthur Vogt)、ケター(Wilhelm Kötter)であった。

〔少数派として〕「反対派に追いやられ」つつも、「コミンテルンにおけるソ連共産党の指導権要求」に反対し、「最も鋭いスターリン批判者」でもあった。主な支持者は「失業党員」であった。

極左派は早くも 1926 年に分裂し、「1928 年までにすべての影響力を失った」。〔1928 年はスターリンがノイマンを KPD 指導部に送り込んだ年である。〕

反ボリシェビキを標榜した I.カッツ・グループがまず 1936 年初めに除名され、Ha.ヴェーバー、ケターも除名された。シュヴァルツとコルシュのグループは分裂して前者グループは 1927 年に上記の「左翼急進派の KAPD」に入った。ショレム・グループはフィッシャーとの協力に戻った。

ローゼンベルク・グループは右派に転向し、のちに多くの極左派同様 SPD に接近した。政治活動から身を引いた者もいた。ヴェディンク反対派の存在も 1927-28 年までで、その後諸派に分散吸収された。

フォークトやノイバウアー、ネダーマイアー(Robert Neddermeyer)、アブシュ(Alexander Abusch)は「テールマン指導部に降伏した」。

7.5. 党機構派(Apparat und Fachleute)〔党官僚〕

党の「多くの幹部やとりわけ機構職員は、特定の傾向に

---

[3] 東プロイセン生まれのマイアー(Ernst Meyer、1887-1930)は、1908 年 SPD 入党、ローザ・ルクセンブルクのグループに所属、スパルタクス同盟共同創設者、KPD 創立大会で本部員選出、1921 年本部指導者となり統一戦線政策追求、しかし本部指導者は 1922 年ブランドラーに(「コミンテルンの陰謀」による)、次いで左派フィッシャーに代わった。マイアーはフィッシャー反対派のリーダーとなった。フィッシャー失脚後テールマンと組み、第 11 回党大会〔1927 年 3 月〕では中央委員に選ばれ政治局等に復活したが、同年 10 月重病にかかり、その後結核も加わり 1930 年 2 月死去(Weber 2008:598ff.)。

[4] 1924 年 5 月の国会選挙で議員になったフィッシャーは翌月の国会開会の際に「議会を“喜劇の劇場”、議員を“資本家たちの操り人形”と嘲笑し、“我々共産主義者はみな大逆犯である”と言明した」(Weber 2008:250)。同選挙で KPD は 54 議席獲得(**表 8**)。

同調することなしに、常にその時々に優勢な分派の支持を公言した」。〔機構職員は「機構運営者」とも記される。いわゆる党官僚である。〕

「党機構内の率直な“専門家”は分派闘争に巻き込まれないようにさえ努力した」。例えば「トーグラー（Ernst Torgler、国会放火事件で逮捕後保護拘禁、党除名）やカスパーのような国会議員、H.ドゥンカーのようなプロパガンダ担当者、ラウ（Heinrich Rau）やヘルンレのような農業専門家、編集者、地方政治家等々」である。

彼ら「機構運営者と専門家たち」は〔分派が力を持つことは自らが位置する機構の意味が軽くなるから〕、「分派闘争に反対し厳しい規律の党に賛成し、とりわけ党のボリシェビキ化を肯定した」。〔さらにスターリン化支持になる。〕

ボリシェビキ化を彼らは「KPD の出自である社会民主主義の伝統〔の残存〕に反対する闘争と理解した」。例えば地方組織が中央委員選出に関与する ZA の仕組みが槍玉に挙がり、地方関与を排除した ZK に変えられた（ZA と ZK については **8 節**参照）。

「スターリン化」の進展により「党内での重みを増した」のは特に、「決定的な権力手段の座に就いているが、どちらかと言えば裏舞台で働いた機構運営者」、つまり「ウルブリヒトやダーレム」であった。

党機構派は左派のうちの「コミンテルンに忠実な」グループ（テールマン中心）と協力した。両者の「**ドイツ・スターリン派への融合**が KPD の最終的なスターリン化のための最も重要な前提であった」。

スターリン化は「党の中央集権化を強めた」。すなわち「中央権限のふさわしい拡大、上からの〔党〕機構指揮の厳格化、指導部の紙誌と教育による判断独占、とりわけ諸分派の壊滅とすべての合法的な反対派の排除」。

これについて「党イデオローグのレンツ=ヴィンターニッツ」はすでに 1924 年に「レーニン主義、それは何よりも党員としての鉄の規律であり、軍隊的中央集権化である」と雑誌に書き、1928 年 12 月 30 日の〔党機関紙〕「赤旗」（Die Rote Fahne）でも党内の「軍隊式の規律」について語った。

〔「レンツ=ヴィンターニッツ」とあるが、ダブル姓ではなくレンツはヴィンターニッツが用いた多くの偽名の 1 つである。この甚だ興味深いインテリについては**補注 1** 参照。〕

7.6. 党機構派と KPD スターリン化=「一枚岩」化

コミンテルンは、「各共産党は絶対的に精神的一枚岩の組織として構築されねばならない」と要求した。

〔これは「」第 5 回世界大会から第 6 回世界大会までのコミンテルン執行委員会の活動報告〕という副題（Weber 2008:1107）の資料集からの引用であるが、いつの執行委かの記載が無い。

これは 1926 年 12 月 15 日のコミンテルン執行委員会活動報告決議の末尾にある次の言葉に違いない：「諸支部〔=各国共産党〕のボリシェヴィキ化の途上における次の実践的な一歩は、分派活動の克服、内部的に統一した、一枚岩の共産諸党の創設でなければならない」（村田 1981:62）。

しかし執行委ではなくすでに世界大会自体が採択した「戦術問題についてのテーゼ」（（第 5 回世界大会、1924 年 7 月 8 日）に同一趣旨があった：「党は、分派や、潮流や、グループの存在を許さない中央集権的な党、単一の塊から鋳られた一枚岩のような党でなければならない」（村田 1980:57-58）。〕

「一枚岩」への「党の統制」をウルブリヒトが「わが党の総点検」（KPD 機関紙「赤旗」1930 年 1 月 3 日掲載の論説表題）によって具体化しようとした。

〔「総点検」は 1930 年 2 月 18-28 日のコミンテルン執行委員会拡大幹部会会議が承認した KPD 中央委員会決議「ドイツ共産党の任務について」の中では次のように記された：「党は、自己批判を展開し、すべての地方党組織、地区グループ、革命的大衆諸組織の内部で広範な点検制度を実施するという方法によってのみ、その活動の速度をはやめ、…現存の幾多の弱点、欠陥、抵抗を克服することができるであろう」とあった。同幹部会会議にこの決議を報告したのはテールマンであった（村田 1982:194, 570）。

ここには決議の日付が無いが、ウルブリヒト論説以前だろう。「総点検」の実務を担うのは党中央専従幹部職員（党官僚）であり、その成果としての党の一枚岩化は日常実務を担う党官僚の権限を強化することになる。だから、ウルブリヒトをはじめとする党官僚にとって好都合であった。なおこの決議の政治方針は社会ファシズム打撃論一色であった。〕

反対派は「KPD のウルブリヒト軍曹」が「総点検」を指示したと揶揄し、この「古くさい軍曹の脳」によれば、党には「偉大な皇帝（スターリン）、天才的な政府（中央委員会）、輝かしい将軍たち（マーカー、ダーレム、ウルブリヒト）」がいるが、「兵卒たちにあってはひどいだらしなさ」らしいと批判した。

KPD の初期には全く違っていた。〔ローザのリードした創立大会だけではなく〕例えば 1921 年の「3 月行動」後の諸分派の対立の際には党の新聞に反対派の声明も反論も載り、「広範な党内民主主義が支配した」〔異論の自由〕。1921 年 12 月 24 日の機関紙「赤旗」には各地の反対派幹部 128 人の発言が載った。1922 年も同様であった。

1923 年の 10 月蜂起の敗北後でさえ各分派の党員が党の諸会議で「その意志を表明することができた」。

1926 年には党内対立が尖鋭化し.離党したグループを含め「ほぼ 1 ダースの分派」が闘い、「党を分裂させる」と脅すことにもなった。そのため「党指導部とその機構」だけではなく「殆どの党員や幹部の間でどの分派活動に対しても嫌悪感」を容易に呼び起こし、「“一枚岩”の党の呼びかけが支持された」。

左派のうちの反対派発行の「通報」（Mitteilungsblatt、1927.03.15）によれば、1927 年初めには以下の「10 分派」（党外グループを含む）があった：

1. ブランドラー派（ベッチャー、ヴァルヒャー、ジーヴェルト（Robert Siewert）、ヴォルフシュタイン、ローゼンベルクら）
2. マイアー派（宥和派）
3. 党官僚（エヴァート、ピーク、ウルブリヒト、プァイファー（Hans Pfeiffer）ら）
4. テールマン派（デンゲル、ノイマン、シュネラー、ノイバウアー、ジュスキント、フォルク（Karl Volk）ら）〔左派の中のコミンテルン忠誠派、当時主流派〕
5. ケムニッツ左派（リーダー：ベルツ（Paul Bertz）、ベルリンと中部ラインにもグループ保持）
6. プファルツ極左グループ（リーダー：Ha.ヴェーバー
7. 極左グループ（=ヴェディンク左派、リーダー：ケター）
8. 左派反対派（リーダー：マスロウ、ウアバーンス（Hugo Urbahns）、フィッシャー）〔左派の中のコミンテ

ルン抵抗派、1924-25 年 KPD 主導グループ〕
9. コルシュの極左グループ
10. シュヴァルツの極左グループ」。

〔続いて Weber は KPD の「急進主義」について説明したが、節を変えて紹介・検討したい(**7.7.節**)。〕

7.7. 革命における議会と暴力

そもそも「KPD エリートにとって 1919 年から 1945 年まで急進主義が典型的であった」。それは「目的(社会主義社会)を革命的、急進的な手段〔=暴力〕によって迅速に達成」しようとする考えであり、「ドイツの諸関係」自体にそのための「少なからぬきっかけと大きな余地」があった。

ローザ・ルクセンブルクも KPD 創立大会において、一方では、「プロレタリア革命」は「テロ」、「暴力」に拠るものではないと言いつつも[5]、同時に「ブルジョアの反革命暴力には…プロレタリアートの革命的暴力が対置される」べきだと言った。

〔下線部分は大会発言ではなく、彼女が起草した綱領[6]にある以下の長いセンテンスである:「ブルジョアの反革命暴力にはプロレタリアートの革命的暴力が、ブルジョアジーの攻撃・陰謀・たくらみにはプロレタリア大衆の不屈の目的追求・警戒心・活動力の不断の用意が、反革命の差し迫った危険には人民の武装と支配階級の武装解除が、ブルジョアジーの議会による妨害策略には労働者団体と兵士団体の意欲的組織が対置されなければならない」(Hortzschansky 1978a:319; Weber 1993:297)[7]。

すでにマルクスの「ゴータ綱領批判」にある次の言葉はあまり有名である:「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この時期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外のなにものでもありえない」(MEW, Bd.19:28, J28-29)。

ここに言う「革命的独裁」(原文はイタリックで強調)は当然「暴力」的である。上記綱領文はゴータ綱領と同じである。

しかしゴータ綱領批判では、「革命的独裁」によって建設される共産主義社会は「低い段階」(レーニンが独断で社会主義と名付けた段階)を含めて、「協同組合的な、生産手段の共有(Gemeingut)に基づく社会」(同前:19,J19)であり、従ってオウエン主義的であった。マルクスは実際オウエンの弟子ブレイから将来社会(過渡期ではなく)のヒントを得た(『経済学批判要綱』)。

「低い段階」もレーニンはロシア的に国家統制によることに切り換えた(『国家と革命』)。当然統制機関が持続・肥大化することになり、「異論の自由」を拒否するレーニンでさえも「粗暴すぎる」と見たスターリンは「過渡期」後も一層の暴力的国家統制独裁を行使した。

周知のようにオウエンは革命ではなく人間本性(共同性)覚醒の教育と個々人の同意による協同社会を目指した。だから彼は、「個人的利害」に基礎を置く「政治経済学」(アダム・スミスら)を全面的に退けた(『社会制度論』)。〕

党のスターリン化によってますます敵と味方の区別の図式が「急進的かつ大雑把」〔かつ都合次第〕になった。「攻撃性」も高まり「赤色戦線戦士同盟〔1924 年結成の準軍事組織〕のような諸組織」を作り「運動の軍隊化を示した」。〔但し当時ドイツの他党派がすでに同様の組織を持っていた〕。

しかも「コミンテルンが明確に暴力支持を公言した」。「その 1928 年綱領」は、「プロレタリアートの暴力の断固たる使用」、「ブルジョア権力の暴力的絶滅」が必要と宣言した。

〔これはコミンテルン第 6 回世界大会が 1928 年 9 月 1 日に採択したコミンテルン綱領の以下の部分を指す:「プロレタリアートによる権力の獲得は、議会内に多数を獲得するという方法で、既成のブルジョア国家機構を平和的に“獲得する”ことではない」、ブルジョアジーはその財産と支配の擁護に「暴力とテロルのあらゆる手段を行使」し、「必死の最も凶暴な闘争なしには、新しい階級に自己の歴史的地位をゆずりわたすことは、ありえない。それゆえ、ブルジョアジーの暴力は、プロレタリアートの苛烈な強力によってのみ、これを打ち砕くことができる。プロレタリアートによる権力の獲得は、ブルジョア権力を強力によってくつがえし、資本主義的国家機構(ブルジョア的軍隊、警察、官僚的職階制、裁判所、議会、その他)を破壊し、それをプロレタリア権力の新しい諸機関とおきかえることである。これらの新しい機関は、なによりもまず、搾取者を鎮圧するための道具である」(村田 1981:341)。〕

しかし KPD の「暴力に対する親しみを形成した」のは、「ロシアの模範」だけではなく、ドイツにおける第 1 次大戦後の「諸革命」騒動や「1930 年からの諸街頭騒乱」、とりわけナチのテロによる KPD への「野蛮な圧迫」も作用した。

また「例えば英国とは異なりカイザー帝国」時代のドイツでは「民主的な行動様式も妥協能力も」養成・実行されず、「のちにも肯定的な特質としては受容されなかった」。このことは〔Weber(2008)所収の〕伝記が示すように KPD 指導者にも該当する。

従って KPD の「暴力的な急進主義にはドイツの現実が反映し」、その政策は「極左的突進と現実的な政治的アプローチの間の揺れになった」。

暴力的な急進主義は「すでに 1920 年」にレーニンによって「“小児病”として理論的に拒絶された」が、その存続により KPD は「1930 年から党の衰退」になった。

〔ここに言及されたレーニンの著作はレーニン(1920)に当たる(1920 年 6 月単行本発行)。その中の章としては「5 ドイツの共産党“左派”。指導者ー党ー階級ー大衆」や「追加」の中の「1 ドイツ共産主義者の分裂」、「2 ドイツの共産主義者と独立派」がある。「小児病」は他の国にも指摘された。さらにレーニンは、彼の著作抜粋集の編集を意図するヴァルガ宛ての手紙(1922 年 3 月 8 日)の中で、「私が 1918 年の春に書いた“「左派”反対の著作」とともに、「“小児病”に反対した小冊子」(レーニン 1920)から「比較的詳しく抜粋すること」を要望した(レーニン 1922:652)。

---

[5] Weber(2008)は自ら編集の KPD 創立大会資料集から引用したが、Ruxemburg(1918a:481ff.、引用文献欄記載のように第 2 版以後は S.479ff.)にもある。それはワイマール国会選挙参加という本部方針への「日和見主義」批判に対する反論である。

[6] 彼女が書いた綱領案はまず 1918 年 12 月 8 日の「赤旗」に「スパルタクス同盟は何を望むか」というタイトルで発表され、その後パンフになった(Hortzschansky 1978a:346)。Hortzschansky(1978a)が掲載した綱領全文の表題は「KPD 綱領」であるが、Weber(1993)では「スパルタクス同盟綱領」である。規約案の党名は「ドイツ共産党(スパルタクス同盟)」であった(Weber 1993:307f.)。

[7] 1918 年綱領のみは以下にも掲載(表題は KPD 綱領):
https://www.marxists.org/deutsch/geschichte/deutsch/kpd/1918/programm.htm

けれども 1920 年 8 月 2 日にコミンテルン第 2 回世界大会が採択した「共産党と議会主義についてのテーゼ」（村田 1978:196-207）は議会の否定的な利用規定であった：

「プロレタリア執権〔独裁〕[8]の形態はソヴェト共和制である」であって、「ブルジョア議会」と社会民主党的「議会主義」は破壊の対象であり、議会に「そのなかで有機的な活動をおこなうため」に参加すること〔=議会主義〕はない。但し「選挙カンパニア」や「議会の演壇」を「革命的扇動」の場としてのみ利用することは「これまで革命運動や政治生活の局外にとどまっていた勤労者層を政治的に獲得するうえで、特別の重要性をもっている」、その意味で単純な「反議会主義」に反対する、等々。

このテーゼに対してイタリア代表のボルディーガが、選挙キャンペーン参加さえも、「選挙が共産主義の目標を達成するための真の基本的な手段だという観念を強め」、同時に「革命を組織し準備するための活動をほとんど完全に停止させる結果」となる、等々と言い、対抗テーゼを提案したが、賛成 3 に終わった。

このテーゼはブハーリンが第 1～2 章を起草し、その後第 3 章が補足され、大会委員会による修正を経て、スイス代表と米国の世界産業労働者連盟代表以外の賛成で採択された（村田 1978:注 76）。この世界大会のロシア代表筆頭がレーニンであったから彼も賛成したことになるし、彼の同意の下に提案されただろう。

レーニン自身はボリシェビキも選挙に参加した憲法制定議会を、不利になったため 1918 年 1 月暴力的に解散した。選挙キャンペーンのみの参加で、「演壇」を忌避した。

フィッシャーの初登院演説（**脚注 4**）はまさに議会を「扇動の場」としての否定的に利用をしようとした。

レーニン自身は同大会初日に「共産主義インタナショナルの基本的任務についてのテーゼ」案（レーニン 1920a）を報告し、8 月 6 日に大多数の賛成（反対 2、棄権 1）で採択された。但し英国労働党への加入問題（16-17 節）のみ異論が多く、分離評決となり、賛成 58、反対 24、棄権 2 となった村田（1978:注 67）。〕

「しかしより重大なことは KPD のソ連への依存の増大によって引き起こされた政治的自主性の喪失であった」。

〔そこには、上記のようにコミンテルン（つまりはソ連共産党）が全支部に繰り返した暴力的急進主義要求への KPD 自体の中に存在した共感も作用したのだろう。但しスターリンはノイマンの暴力的なナチ対抗策を排除した。〕

かくて KPD の指導的幹部や中堅幹部の間では「“ロシア”への信仰告白とその時々のソ連共産党指導部への従順が公理となり」、KPD のある地方紙は、共産主義者にとってソ連が「ただひとつの祖国」だと謳った。

〔ソ連に「従順」ではなかったミュンツェンベルクも、ソ連の実生活を良く知っていたにもかわらず、その紙誌ではソ連を「楽園」と宣伝した。〕

「ソ連、ソ連共産党、とりわけスターリンへのいかなる批判も“偏向”、反革命的反階級的、“帝国主義的戦争扇動者”への支持と見なされた」。こうしたいわば「イデオロギー的テロ」が「軍隊的規律」確立と「中央集権強化」に役立った。

そのため「指導者」（Führer）テールマンへの個人崇拝が形成され[9]、地区責任者（Bezirksleiter）さえ、地区指導者（Bezirksführer）と呼ばれるようになった。

ローゼンベルクの見立てによれば、党の急進主義的アジテーションは、〔大恐慌下で増加した〕「ユートピア的・急進的な失業者のニーズ」に応じたが、「企業内の労働者、職員、知識人、中産階級には党は何も約束しなかった」。

その上あくまで「SPD との厳格な一線」を維持し続けた。

〔一線を画す以上に、社会ファシズム論に基づき社会民主主義者を主敵と見なし、共産主義者にとって肝心の「労働者階級」を分断させた。〕

7.8. 党機構と関連組織の専従職員

「1927 年の国家監督部」〔ドイツの関税・税管理部〕によると、党自体と関連会社を含む KPD による直接雇用者は 2348 人であり、党員約 14 万人のほぼ 2%であった。そのうち党自体が給与を支給した「政治的幹部」は「おそらく 500 人」であり、それ以外の多数は「党の印刷会社や出版社の労働者および速記タイピスト等々」であった。

ほかに 3736 人の党員が消費協同組合やドイツ内のソビエト〔ないしコミンテルン〕機関に就業した。

以上の合計「5000 人以上」〔とあるが正しくは 6000 人以上〕の党員が直接・間接に党に経済的に依存した。ベルリンに限ると 1927 年の公式数字で 527 人が党の職員、438 人が関連組織に雇われ、党員全体の 7.2%に達した。

ほかに非合法組織があった。軍事組織（当初は M 部門（M-Apparat）、そ縮小後キッペンベルガーが再建した AM 部門（AM-Appara））[10]やドイツ国防軍分解のための Z 部門（Z-Apparat）、クーリエサービスなどであった。

8. KPD 本部・中央委員会（ZA と ZK）等（1919-1939 年）

1918 年 11 月からの「11 月革命」または「ドイツ革命」の最中、KPD が 1918 年末から翌元旦の第 1 回党大会で創立された。その際、前身のスパルタクス同盟の名前、組織体制、機関紙を継承した（**2 節**）が、徐々にボリシェビキ風に変化した。組織面では特に中央機関大きく変化した。本部→本部と政治局と ZA→政治局と ZK である（ZA と ZK の違いは下記）。

---

[8] 「執権」という奇妙な訳語は、日本共産党が「1973 年の第 12 回党大会で…“独裁”と訳されていた“ディクタツーラ”という用語を“執権”という訳語に改め」た（不破 2014）ためだろう。しかし執権は鎌倉幕府ほかの個人職位の名称であり、ある階級の絶対的支配（Diktatur）を示す訳語にはまさに「独裁」がふさわしい。また個人ではなく階級の独裁だから、上記のようにゴータ綱領批判には「プロレタリアの独裁」ではなく「プロレタリアートの独裁」とある。あきれたことに、邦訳『マルクス・エンゲルス全集』にも独裁→執権という「訳語改訂表」がある。

[9] 党中央がスターリンに倣って作り上げるテールマン個人崇拝の様子と彼の実像甚だしい落差を Buber-Neuman（1957: 286f., J253-4）が描写した。

[10] キッペンベルガー（Hans Kippenberger、1989-1937）は第 1 次大戦後少尉として退役。1924 年モスクワで軍事教育を受けて帰国し、コミンテルンの委託で KPD の AM 部門を設立した。AM 部門は Antimilitaristischer Apparat（反軍部門）の略であるが、実態は軍事部門であった。1928 年国会議員当選後も引き続き AM 部門を率いた。そのためゲシュタポは彼を「狂ったように手配」した〔が、失敗〕。彼の功績は大きいが、KPD 内で「ウルブリヒトの敵対者」を支援したため「ウルブリヒトとピークの絶え間ない攻撃」により 1935 年中央委員失脚、ソ連に呼びつけられ 1936 年逮捕、翌年銃殺された（Weber 2008:447f.）。「ウルブリヒトの敵対者」とはミュンツェンベルクのことであり、二人は「親密な同志」であった（https://www.muenzenbergforum.de/chronik/の 1936 年 11 月 6 日）。

KPD は 1923 年まで中央指導部メンバーを公表したが、1924 年から「厳秘」とし、ようやく戦後 1966 年に東独(SED)がリストを発表した(Weber 1969:7)。KPD の「本部」体制は前身のスパルタクス同盟から継承された。

第 1 回党大会は「本部」を設け、スパルタクス同盟本部員 12 人を継承した(**2 節**と**写真 3**)。うち 3 人が殺害、2 人が投獄されたあと、1919 年 3 月 29 日の全国協議会でツェトキンが本部員に追加された(**2 節**)。

第 2 回党大会(1920 年 2 月)から本部をチェックする中央委員会(ZA)が、1920 年 8 月から本部の一部が担当する政治局が設置された。

第 10 回党大会(1925 年 7 月)以後は ZA がボリシェビキ的な中央委員会(ZK)に変更になり、本部は廃止された。

ZA は Zentralausschuß の、ZK は Zentralkomitee の略語で、ともに意味は中央委員会である。しかし選出の仕組み、関連して任務が異なった。

ZA 委員は各地区の提案の中から党大会が選び、本部を監督する任務を負った。これは「反対派の地区も指導部に代表されることを保証するため」であり、大きな地区は各 2～3 名、他は各 1 名を提案した。例えば 1923 年の第 8 回党大会ではベルリン、ヴァッサーカンテ、ラインラント北部が各 3 名、チューリンゲン、エルツ山地・フォークトラント、ハレ・メルゼブルク、ラインラント南部、中部ラインが各 2 名、他の地区は各 1 名であった(計 26 地区)。

選出された委員名には提案した地区名が付記された(地区名は原書にはあるが、下記リストでは省略)。

こうした仕組みは、上記のように、社会民主主義的と批判された。

KPD は 1925 年〔第 10 回党大会〕の規約で ZA を廃止し、ボリシェビキ的な ZK に変更し、選出を党大会の専権事項とし、地区提案を廃止した。これにより「地区はそのコントロール機関を失い、党指導部に対するその影響力が低下し」、ZK が「今や唯一の指導機関となった」(Weber 1969,Bd.1:261)。

同時に本部もなくなり、ZK 選出の政治局が最高指導機関となった。

以下が本部ないし中央委員会(ZA または ZK)ほかの歴代メンバーである(－は姓記述無しを示す):

●1918 年末-1919 元旦第 1 回党大会:本部(Zentrale):Hermann Duncker, Käte Duncker, Hugo Eberlein, Paul Frölich, Leo Jogiches, Paul Lange, Paul Levi, Karl Liebknecht, Rosa Luxemburg, Ernst Meyer, Wilhelm Pieck, August Thalheimer.〔**写真 1・2**〕

●1919 年 10 月第 2 回党大会:本部:Heinrich Brandler, Hugo Eberlein, Paul Frölich, Paul Levi, Ernst Meyer, August Thalheimer, Clara Zetkin.

補充候補:Paul Frölich〔重複〕, Max Hammer, Fritz Heckert, Josef Köring, Paul Lange, Ernst Reuter-Friesland〔のち初代西ベルリン市長〕, Jacob Walcher

●1920 年 2 月第 3 回党大会:本部:Heinrich Brandler, Hugo Eberlein, Paul Frölich, Ernst Meyer, Wilhelm Pieck, August Thalheimer, Clara Zetkin.

補充候補: Arthur Hammer, Fritz Heckert, Joseph Köring, Paul Lange, Ernst Friesland (Reuter), Fritz Schnellbacher, Jakob Walcher.

中央委員会(ZA)〔各 ZA 委員に付記された提案地区名を省略、以下同様〕:Ernst Brandt, Karl Forst, Willi Langrock, Paul Malachinski, Hans Pfeiffer, Jakob Schloer, Hermann Schroers, Karl Schulz, Robert Siewert, Hans Tittel, Fritz Winguth

●1920 年 4 月第 4 回党大会:本部:Heinrich Brandler, Hugo Eberlein, Paul Levi, Ernst Meyer, Wilhelm Pieck, August Thalheimer, Clara Zetkin.

同補充候補:Frölich Paul, Fritz Heckert, Jacob Walcher, Ernst Reuter-Friesland, Paul Lange, Friedrich Schnellbacher, Rosi Wolfstein

中央委員会(ZA):Karl Baier, Ernst Brandt, Karl Forst, －Garge, Johann Geier, Otto Graf, Ernst Graul, Erna Halbe, －Jakob, Karl Klein, Willi Langrock, Hans Pfeiffer, －Rockow, － Schmidt, Friedrich Schnellbacher, Jakob Schloer, Robert Siewert, Hans Tittel, Fritz Winguth, Karl Winkler〔－:姓記述なし、以下同様〕

●1920 年 11 月第 5 回党大会:本部:Heinrich Brandler, Hugo Eberlein, Paul Levi, Ernst Meyer, Wilhelm Pieck, August Thalheimer, Clara Zetkin.

同補充候補: Paul Frölich, Fritz Heckert, Jakob Walcher, Paul Lange, Ernst Reuter-Friesland, Fritz Schnellbacher, Rosi Wolfstein.

中央委員会(ZA):－ Aschauer, Karl Baier, Ernst Brandt, Eugen Eppstein, － Garge, Paul Gmeiner, Karl Jannack, Jakob Konieczny, Bernhard Kühl, Willi Langrock, Georg Lechleiter, Arthur Marks, Valeska Meinig, Joseph Miller (Sepp), Edwin Morgner, Ulrich Rogg, Friedrich Schnellbacher, Robert Siewert, Hans Tittel, Gustav Triebel, Fritz Winguth, －Wolf

●1920 年 12 月第 6 回党大会(合同大会)〔KPD と USPD 左派の合同〕:議長 Ernst Däumig, Paul Levi.

書記: Heinrich Brandler, Otto Braß, Wilhelm Koenen, Wilhelm Pieck, Hermann Remmele, Walter Stoecker, Clara Zetkin.

陪席(Beisitzer):Otto Gäbel, Curt Geyer, Fritz Heckert, Adolph Hoffmann, August Thalheimer, Clara Zetkin.

中央委員会(ZA):Waldemar Behrs, Max Bock, Paul Böttcher, Bruno Böttge, Franz Dahlem, Paul Franken, Ernst Reuter-Friesland, Otto Geithner, Otto Graf, Max Heydemann, Alwin Hentschel, Wilhelm Herzog, Karl Jannack, Walter Kaiser, Leo Klinger, Arthur König, Otto König, Josef Koering, Hermann Krause, Hedwig Krüger, Herbert von Mayenburg, Fritz Ohlhof, Karl Poschmann, Heinrich Rau, Ulrich Rogg, Friedrich Schnellbacher, Robert Siewert, Johann Skjellerup, Konrad Sychalla, Bruno Schramm, Georg Schumann, Josef Staimer, Heinrich Teuber, Ernst Thälmann, Hans Tittel, Hans Weber, Paul Wegmann, Hugo Werner, Karl Winkelsässer.

●1921 年 8 月第 7 回党大会:本部:Paul Böttcher, Bertha Braunthal, Hugo Eberlein, Ernst Reuter-Friesland, August Thalheimer.

陪席(Beisitzer):Otto Gaebel, Kurt Geyer, Fritz Heckert, Edwin Hoernle, Adolph Hoffmann, Ernst Meyer, Wilhelm Pieck, Hermann Remmele, Felix

Schmidt, Jakob Walcher, Rosi Wolfstein, Clara Zetkin.

中央委員会(ZA):Heinrich Böschen, Alfred Bochert, Noah (August) Borowski, Karl Eckhardt, Eugen Eppstein, Ruth Fischer, Paul Franken, Otto Geithner, Ottomar Geschke, Theodor Gohr, Martin Hoffmann, Anton Jadasch, Karl Jannack, Leo Klinger, Bernhard Kühl, Arkadi Maslow, Herbert von Mayenburg, Peter Mieves, Wilhelm Obendiek, Jakob Ritter, Willi Sachse, Robert Siewert, Konrad Sychalla, Josef Staimer, Max Strötzel, Adolf Scholz, Bruno Schramm, Reinhold Schoenlank, Georg Schumann, Ernst Thälmann, Hans Tittel, Hugo Urbahns, Willi Wallstab, Hans Weber, Ernst Wollweber, Georg Zwilling.

補充候補:Max Andre, ― Donitra, Hans Fuchs, Erich Gentsch, Gustav Haubold, Erich Hausen, Karl Hehnen, August Heisinger, Johann Helfgen, ― Herwig, Rudolf Heyer, Karl Hohnerkamp, Johannes Höcker, Josef Klose, Josef Koering, Willi Langrock, Karl Lotz, Arkadi Maslow, Fritz Meier, Gustav Menzel, Peter Müller, Fritz Pescha, Hans Pfeiffer, Kurt Prutkow, Artur Rauhe, Siegfried Rädel, Hans Sippe!, Johann Skjellerup, Joseph Smolka, Alois Schlichting, Hans Schmidt, Gustav Schreiber, Max Vettermann, Karl Völker, Kurt Zimmermann

●1923 年 1 月第 8 回党大会:本部:Karl Becker, Paul Böttcher, Heinrich Brandler, Hugo Eberlein, Arthur Ewert, Paul Frölich, Fritz Hecken, Edwin Hoernle, August Kleine (Guralski), Wilhelm Koenen, Rudolf Lindau, Hans Pfeiffer, Wilhelm Pieck, Hermann Remmele, Felix Schmidt, Georg Schumann, Walter Stoedeer, August Thalheimer, Walter Ulbricht, Jakob Walcher, Clara Zetkin

〔1923 年 5 月 16-17 日 ZA 会議が上記本部に左派 4 人を追加:Ruth Fischer, Ottomar Geschke, Arthur König, Ernst Thälmann(Weber 1969,Bd.1:48)。左旋回の開始であった。〕

中央委員会(ZA):Heinrich (Hans) Alles, ― Mittelrhein, Heinrich Böschen, Alfred Buhler, Erich Czernecki, Paul Dietrich, Adam Ebner, Karl Eckhardt, Josef Eisenberger, Eugen Eppstein, Ruth Fischer, Ottomar Geschke, Karl Grönsfelder, Kurt Grünthaler, Gustav Haubold, Erich Hausen, Karl Jannack, Bernard Koenen, Arkadi Maslow, Joseph (Sepp) Miller, Gustav Mößner, Alfred Oelßner, August Radtke, Siegfried Rädel, Jakob Ritter, Willy Sachse, Robert Siewert, Albert Stolzenburg, Carl Stucke, Alois Schlichting, Adolf Scholz, Ernst Thälmann, Albin Tenner, Hugo Urbahns, Willy Wallstab, Hans Weber, Ernst Wollweber, Otto Zimmermann.

補充候補:Jakob Greiß, Fritz Glagau, Alfred Günther, Max Hammer, Ismar Heilhorn, Friedrich Heilmann, Albert Hermann, Rudolf Hommes, Eduard Karas, Willy Lischewski, Karl Lüpnitz, Karl Meixner, Johann Meyer, Peter Mieves, Wilhelm Müller, Franz Reichel, Ludwig Rieß, Ulrich Rogg, Paul Schlecht, Hans Schmidt, Jeanpierre Schneider-Lechner, ― Mittelrhein, Max Schütz, Wilhelm Schwan, Arthur Teuscher, Fritz Weigel, Johann Weingärtner, ― Süd, Erwin Zeltinger, Robert Harnhorn Ziselsky

●1924 年 4 月第 9 回党大会:本部:Hugo Eberlein, Ruth Fischer, Wilhelm Florin, Ottomar Geschke, Iwan Katz Arthur König, Arkadi Maslow, Hermann Remmele, Paul Schlecht, Ernst Schneller, Werner Scholem, Max Schütz, Wilhelm Pieck, Arthur Rosenberg, Ernst Thälmann.〔左派が主導権〕

●1925 年〔10 月〕第 10 回党大会:中央委員会(ZK):Konrad Blenkle, Philipp Dengel, Hugo Eberlein, Ruth Fischer, Wilhelm Florin, Ottomar Geschke, Arthur Golke, Fritz Heckert, Arkadi Maslow, Wilhelm Pieck, Hermann Remmele, Fritz Schimanski, Arthur Rosenberg, Joseph Schlaffer, Paul Schlecht, Ernst Schneller, Werner Scholem, Wilhelm Schwan, Max Strötzel, Ernst Thälmann, Hugo Urbahns, Hans Weber, Jean Winterich.

(同候補)Paul Bertz, Arthur Ewert, Otto Kühne, Joseph Lenz (Winternitz), John Schehr, Max Strötzel, Jean Winterich

●1927 年 3 月第 11 回党大会:中央委員会(ZK):Karl Becker, Adolf Betz, Johann (Julius) Biefang, Konrad Blenkle, Franz Dahlem, Philipp Dengel, Paul Dietrich, Hugo Eberlein, Arthur Ewert, Leo Flieg, Wilhelm Florin, Max Gerbig, Ottomar Geschke, Arthur Golke, Walter Hähnel, Fritz Heckert, Wilhelm Hein, Paul Merker, Ernst Meyer, Willy Münzenberg, Michael Niederkirchner, Helene Overlach, Wilhelm Pieck, Hermann Remmele, Joseph Schlaffer, Ernst Schneller, Hans Schröter, Fritz Schulte, Georg Schumann, Walter Stoecker, Ernst Thälmann, Walter Ulbricht, Jean Winterich, John Wittorf, Clara Zetkin

(同候補)Albert Bassüner, Franz Bellemann, Gerhart Eisler, Karl Fischer, Heinrich Galm, Paul Grasse, Ernst Grube, Joseph Hark, Erich Hausen, Reinhold Jürgensen, Hans Kollwitz, Willy Leow, Heinz Neumann, Alfred Noll, John Schehr, Heinrich Süßkind, Heinrich Wesche, Joseph Lenz (Winternitz).〔Lenz は偽名、Winternitz が本名(**補注 1** 参照)。〕

●1929 年 6 月第 12 回党大会:中央委員会(ZK):Joseph Büser, Franz Dahlem, Philipp Dengel, Leo Flieg, Wilhelm Florin, Ottomar Geschke, Arthur Golke, Ernst Grube, Walter Häbich, Margarethe Hahne, Fritz Hastenreiter, Fritz Hecken, Wilhelm Hein, Wilhelm Kasper, Robert Klausmann, Wilhelm Koenen, Karl Küll, Joseph Lenz (Winternitz), Willy Leow, Friedrich Lux, Paul Merker, Willy Münzenberg, Heinz Neumann, Michael Niederkirchner, Gustav Nitsche, Helene Overlach, Wilhelm Piedt, Gustav Pötsch, Hermann Remmele, Rudolf Renner, Helene Rosenhainer-Fleischer, Joseph Schlaffer, Fritz Schulte, Walter Stoecker, Ernst Thälmann, Walter Ulbricht, Karl Winter, Jean Winterich.

(同候補)Paul Bertz, Klara Blinn, Philipp Daub, Karl Fischer, Fritz Grosse, Walter Kassner, Hans Kippenberger, Willi Koska, Frida Krüger, Karl Kübler, Albert Kuntz, Kurt Müller, Alfred Noll, Paul Opitz, Hans Pfeiffer, Siegfried Rädel, John Schehr,

Albert Schettkat, Heinrich Schmidt, Hermann Schubert, Fritz Schuldt, Franz Stenzer, Arthur Ullrich, Otto Voigt, Willi Voigt, Erna Weber.

●1935 年 10 月「ブリュッセル党協議会」中央委員会（ZK）：Anton Ackermann, Paul Benz, Franz Dahlem, Leopold Flieg, Wilhelm Florin, Walter Hähnel, Fritz Heckert, Paul Merker, Willi Münzenberg, Wilhelm Pieck, Elli Schmidt, Ernst Thälmann, Walter Ulbricht, Herbert Wehner, Heinrich Wiatrek.

（同候補）Wilhelm Knöchel, Werner Kowalski, Karl Mewis.

●1939 年 1-2 月ベルン党協議会：中央委員会（ZK）：Anton Ackermann, Paul Bertz, Franz Dahlem, Wilhelm Florin, Walter Hähnel, Wilhelm Knöchel, Paul Merker, Karl Mewis, Wilhelm Pieck, Siegfried Rädel, Elli Schmidt, Emil Svoboda, Ernst Thälmann, Walter Ulbricht, Herbert Wehner, Heinrich Wiatrek, Johann Koplenig（Koplenig はオーストリア共産党）.

（同候補）Duhnke は 3 人選出予定だったとし、Abusch、Eisler、Dengel と推測。

（出所）Weber（2008:1073ff., Weber 1969 Bd.1:48）。
Duhnke（1972: 312,J 下 465）の名簿と異なる場合がある。

9. ドイツ国会選挙結果（1919-1933 年）

表 8 ドイツ国会選挙結果：得票率・獲得議席（1919-1933 年）

政党	略語	1919（1 月）	1920/22（6 月）	1924 I（5 月）	1924 II（12 月）	1928（5 月）	1930（9 月）	1932 I（7 月）	1932 II（11 月）	1933（3 月）
得票率										
ナチ党	NSDAP			6.55*	3.00**	2.63	18.33	37.36	33.09	43.91
ドイツ民族自由党	DVFP					0.87				
キリスト教国民農民党	Landvolk					1.89	3.17	0.25	0.13	
ドイツ国家国民党	DNVP	10.27	15.07	19.45	20.49	14.25	7.03	5.93	8.83	7.97
キリスト教社会民族奉仕党	CSVd					0.2	2.49	1.1	1.48	0.98
経済党	WP				3.32	4.54	3.95	0.4	0.31	
ドイツ国民党	DVP	4.43	13.9	9.2	10.07	8.71	4.75	1.18	1.86	1.1
バイエルン人民党	BVP	19.67	4.39	3.23	3.74	3.07	3.03	3.26	3.09	2.73
中央党	Zentrum		13.64	13.37	13.6	12.07	11.81	12.44	11.93	11.25
バイエルン農民同盟	BBB	0.91	0.78	2.37		1.56	0.97	0.37	0.42	0.29
民主党	DDP	18.56	8.28	5.65	6.34	4.9	3.78	1.01	0.95	0.85
社会民主党	SPD	37.86	21.92	20.52	26.02	29.76	24.53	21.58	20.44	18.25
独立社会民主党	USPD	7.62	17.63	0.8	0.33	0.07	0.03			
共産党	**KPD**		**2.09**	**12.61**	**8.94**	**10.62**	**13.13**	**14.56**	**16.86**	**12.32**
（その他）		0.68	2.3	6.25	4.15	4.86	3.02	0.56	0.61	0.35
投票率		83.02	79.18	77.42	78.76	75.6	81.95	84.06	80.58	88.74
獲得議席										
ナチ党	NSDAP			32*	14**	12	107	230	196	288
ドイツ民族自由党	DVFP					—				
キリスト教国民農民党	Landvolk					9	19	2	—	
ドイッ国家国民党	DNVP	44	71	95	103	73	41	37	52	52
キリスト教社会民族奉仕党	CSVd					—	14	3	5	4
経済党	WP				17	23	23	2	1	
ドイツ国民党	DVP	19	65	45	51	45	30	7	11	2
バイエルン人民党	BVP	91	20	16	19	17	19	22	19	19
中央党	Zentrum		64	65	69	61	68	75	71	73
バイエルン農民同盟	BBB	4	4	10		8	6	2	3	2
民主党	DDP	75	39	28	32	25	20	4	2	5
社会民主党	SPD	165	103	100	131	153	143	133	121	120
独立社会民主党	USPD	22	83	—		—	—			
共産党	**KPD**		**4**	**62**	**45**	**54**	**77**	**89**	**100**	**81**
（その他）		3	6	19	12	11	10	2	3	1
議席数		423	459	472	493	491	577	608	584	647
（原注）*：DVFP と NSDAP の合計。**：NSFB としての合計。										

（出所）木村（2001:付録）。第 1 行の（）内は青木が追記。（注）NSFB は 1924 年 10 月ナチ党（当時非合法）とドイツ民族自由党が合同した Nationalsozialistische Freiheitsbewegung（国家社会主義自由運動）の略語で、選挙後すぐ 1925 年 2 月解消。

表 8a ドイツ国会選挙結果：得票数（1924-1932 年）（百万票）

政党	略語	1924 年 5 月	1924 年 12 月	1928 年 5 月	1930 年 9 月	1932 年 7 月	1932 年 11 月
ナチ党	NSDAP	1.91	0.9	0.81	6.4	13.74	11.73
社会民主党	SPD	6.0	7.88	9.15	8.57	7.96	7.24
共産党	**KPD**	**3.69**	**2.7**	**3.26**	**4.59**	**5.28**	**5.98**

（出所）Duhnke（1972:52, J 上 83）。（注）1924 年 12 月のナチ党得票は NSFB のそれだが、原注はない。

10. 非合法化された KPD の対ドイツ国内指導体制

1933 年 1 月ナチ政権が成立するとすぐに KPD は弾圧対象となり（**表 7**）、ベルリンに非合法の「国内指導部」（Landesleitung）が設置された。

しかしこれは「かなり無計画」なもので、早くも 1935 年 1 月 27 日国内指導部 5 人全員が逮捕された。しかも国内に残っていた最高幹部もドイツを離れた。ゲシュタポとナチ突撃隊の攻撃により「党組織は急速に崩壊した」〔とりわけ指揮体制がますます崩壊した〕。

そこで、1934 年にコペンハーゲンやアムステルダム、ザールルイ〔ザールラント内〕、プラハ、スイスに設置した「国境拠点」（Grenzstelle）を、1937 年 1 月に「地域指導部」（略称 AL または ABL）に改組した（**表 9**）。同指導部は各々3～4 人による集団指導で、概ね「第二次世界大戦勃発まで存在した」（Duhnke 1972:190f.,J 上 273-5）。

また同指導部発足に伴い、1935 年からプラハに設置されていた「中央亡命指導部」（**6.1.節**参照）は該当する地域指導部に吸収された（archivesportaleurope.net）。

なお Duhnke（1972:200ff.,J 上 283-6）によれば、ナチ政権下で多くの KPD 党員が逮捕されたが、そのうち多数はナチ政権下での非合法活動ではなく「1933 年より前の活動」が理由であった。従って KPD のドイツ国内での非合法反ナチ運動は大きくはなかった。KPD が国内の反対運動を「指導・推進」したという東独の「歴史家および政治家」の「宣伝本意」の主張を「無条件に容認することはできない」（資料を例示）。「実在または潜在的な反ナチグループの数に関しては共産主義者が相対的に大きな役割を果たした」が、「彼らの活動（特に外国からの非合法文献の密輸と配布）の大部分は効果が無かった」。

表 9 ドイツ隣接諸国設置の KPD 地域指導部（Abschnittsleitung、1937~1939）

名称（対象国内地域）	拠点所在	責任者
中央（ベルリン、中部ドイツ、東部ドイツ）	1938 年 11 月までプラハ、その後ストックホルム	プラハでは H. Beimler, S. Rädel, E. Gentsch 、ストックホルムでは Karl Mewis
北部（北部ドイツ）	コペンハーゲン、1940 年からストックホルム	1935 年末まで Wilhelm Adam (Gilbert), 1936 年 3 月から Sepp Schwab (Louis), 1937 年から Paul Helms, 1938 年聖霊降誕祭から Heinrich Wiatrek (Weber)
西部（西北部ドイツ、ルール地方）	アムステルダム	1936 年 2 月まで Philipp Daub (Lips, Horn), 1936 年 2 月から Paul Bertz, 1937 年 5 月から Erich Gentsch (Alwin)
南部（バーデン、ヴュルテンベルク、バイエルン）	チューリッヒ	1936 年 2 月まで Paul Bertz, 1937 年初まで Siegfried Rädel, 1938 年春まで Konrad Blenkle, 1938 年春から Paul Elias
南西部（中部ライン）	ブリュッセル	1937 年末から Otto Niebergall (René)
ザール（ザール、プファルツ）	ファルバッハ（仏）	1935 年 Otto Niebergall (René), 1938 年初めから Josef Wagner [f]

（出所）Weber（2008:1079）。対象国内地域は Duhnke（1972:193, J 上 275-6）から補足。「中央」の責任者は Duhnke（同前）から、他の責任者は archivesportaleurope.net から補足。
（注）Duhnke（同前）には中央以外の地域指導部責任者についても異なる記述があるが、省略する。

11. 「ドイツ人民戦線のための呼びかけ」署名者と掲載誌

フランスの場合と異なりドイツの在外人民戦線結成には KPD 内の意見対立のため困難が生じたが、それでも 1936 年 12 月 21 日ないし 1937 年 1 月 9 日に「ドイツ人民戦線のための呼びかけ」は各党派と無党派知識人が署名した。

その署名者リストが「展望」（Die Rundschau）と「新世界舞台」（Neue Weltbühne）という週刊誌に発表された（**表 10**）。ところが、「若干の署名者」が署名を撤回したり、署名自体を否認したため、両誌のリストの間に違いが生じた（**表 10** の原注参照）。また撤回や否認騒ぎが落ち着いてからもこの呼びかけは「亡命者の紙誌の殆どに掲載されなかった」（Duhnke 1972:243,J 上 348）。

1937 年 3 月ナチ親衛隊保安局長作成の「亡命者紙誌と文献」と題した「手引き」（Tutas 1973:135ff.）の評価によれば、「展望」誌は、亡命共産主義者が主に協力してコミンテルンが発行する週刊誌で、公称 1 万部。「全世界の共産主義の活動についての重要情報源」であり、人民戦線の宣伝や指導的なボリシェヴィキの演説、テールマンらの釈放要求、そして特に詳しく「ソ連の大きな裁判」〔粛清裁判〕が載り、バーゼル（スイス）で印刷されていた。

同じ「手引き」によれば、「新世界舞台」誌は「政治・芸術・経済のための週刊誌」として 1905 年創刊された「世界舞台」の改名誌で、当時プラハ・チューリッヒ・パリでブジスラフスキー（Dr. Hermann Budzislawski）が発行した。

同誌は「元々平和主義の指導的機関誌」であり、「以前の編集者には…オシーツキー（Carl von Ossietzky）もい

た」。「今では人民戦線を急進的に支持し」、「共産主義者の“ドイツ人民新聞”(DVZ)」によって宣伝されている。「同誌は無条件にモスクワの利益を代弁し、スペイン内戦の間には特に強く反ドイツ扇動をしている」。「社説は通常ブジスラフスキー」が書き、マン(Heinrich Mann)が自らの「呼びかけをたびたび発表している」。ほかの協力者にはアウフホイザー(S. Aufhäuser)やブロッホ(Ernst Bloch)、フライ(Bruno Frei)ほか 9 人〔氏名省略〕その他がいた。

ブジスラフスキー(1901-1978)はユダヤ系ドイツ人で、1929 年 SPD 入党。1932 年 KPD 入党を希望したが、ウルブリヒトの勧めで SPD 内の KPD 連絡員として残留。1934-39 年「新世界舞台」編集長。戦後東独ライプチッヒ大学でジャーナリズム関係の研究所長や学部長を努めた(Müller-Enbergs 2010:188f.)。*Sozialistische Journalistik*(Dietz 1966)などの著書がある。

つまり両誌とも共産党系であり、両誌以外の「亡命者の紙誌の殆ど」がこの呼びかけを無視したことになる。

なお、オシーツキー(1889-1938)は平和運動家であり、〔ソ連の協力のもとでの〕ドイツ再軍備を「世界舞台」誌 1929 年 11 号(3 月 12 日)において H. Jäger という偽名で暴露した。それによる服役中の 1935 年にノーベル平和賞を受賞した。東独時代には東ベルリンのパンコウ区には彼の名を冠した学校があった。そのアビトゥーアの生徒たちが 1988 年 10 月に軍事パレード反対などの声を上げ処分され、東独反体制派(環境図書館など)が抗議運動を巻き起こした。この事件も東独体制転換につながる事件であった(関係資料や解説はウェブサイト「jugendopposition.de」参照)。

表 10「ドイツ人民戦線のための呼びかけ」署名者

KPD	SAP	「無党派」(知識人)	
W. Pieck	Willi Brandt [= Karl Frahm]	L. Feuchtwanger	Bodo Uhse [KPD]
W. Florin	H. Diesel [= Max Diamant]	Arnold Zweig	Theodor Fanta
W. Ulbricht	K. Franz [= Paul Frölich]	Heinrich Mann	Wolf Frank
F. Dahlem	R. Frey [偽名]	Prof. Georg Bernhard	Dr. Felix Bönheim [KPD?]
Kurt Funk [= Herbert Wehner]	Dr. Fried [= Fritz Sternberg]	Ernst Toller	Johannes R. Becher [KPD]
Paul Merker	J. Ewas [偽名]	Prof. E. J. Gumbel [KPD?]	Walter Schönstedt
Willi Münzenberg	M. Koch [偽名]	Rudolf Olden	Prof. Dr. J. Schaxel
A. Ackermann	K. Sacks [= Walter Fabian]	Balder Olden	Prof. Fritz Lieb [KPD?]
[Fritz] Weber [= Heinrich Wiatrek]	J. Schwab [= Jacob Walcher]	E. E. Kisch [KP-CSR oder KPD]	Klaus Mann
Paul Bertz	Th. Vogt [偽名]	Rudolf Leonhard [KPD?]	Dr. H. Budzislawski
Wilhel Koenen		Prof. Alfons Goldschmidt	Kurt Kersten
Ph. Daub		Kurt Rosenfeld [früher SAP]	Ernst Bloch [KPD?]
Hugo Gräf		Prof. Anna Siemsen	Wieland Herzfelde [KPD]
		Otto Lehmann-Russbüldt	Max Seydewitz [SPD]
		Dr. Wolfgang Hallgarten	

社会民主主義者(Sopade の承認なしに独自イニシアチブで署名)			
Rudolf Breitsmeid	Prof. Siegfried Marck	Emil Kirsmmann	Karl Bömel
Albert Grzesinski	Dr. E. Drucker	Dr. Hans Hirsmfeld	Alexander Smifrin
Max Braun	Prof. Alfred Meusel [b]	Max Hoffmann	Richard Kirn [ママ] [d]
Prof. G. Denicke	Alfred Braunthal	Bruno Süss	Bernhard Menne [e]
Toni Sender [a]	Prof. Julius Lips	Siegfried Aufhäuser [c]	Dr. Otto Friedländer

(出所)Duhnke(1972:244f.,J 上 349-350)。(原注)a:「新世界舞台」では欠如。b:おそらくKPD。c:「新世界舞台」で署名否認。d:ヒルファーディンク(Rudolf Hilferding)のことで、通常は Kirn ではなく Kern、「新世界舞台」では欠如。e:「新世界舞台」で署名否認。[ ]内は Duhnke の注記。〔補注〕[]内のように「無党派」の中には KPD または SPD 党員が一部含まれる。掲載誌や原注にある「欠如」と「否認」の意味については **11 節**本文参照。SAP、KP-CSR、Sopade は略語欄参照。

12. KPD 中央委員会文書が主に言及した人物

表 11 はドイツ連邦公文書館所蔵の KPD 中央委員会関係目録から作成した。初期や、特に 1933 年以後は一部の文書しかない。表にある ZA と ZK（1925 年 7 月の第 10 回党大会以後）はともに中央委員会を意味するが、選出方法や任務が異なる（**8 節**参照）。

この表に挙げられた人名は同文書館所蔵の各中央委員会文書の中で「主に言及された人名」に限られ、議題によって「主に言及され」頻度が異なる。しかし同時にそこには各幹部の浮沈もかなり反映されている。

表 11 KPD 中央委員会（ZA・ZK）文書が主に言及した人物

開催日	主に言及された人名	備考
ZA		
1920.0207-08 と同 08.25	〔記載無し〕	
1920.10.23	〔記載無し〕	KPD-ZA 第 5 回
1921.01.27	Wilhelm Koenen, Paul Levi, Wilhelm Pieck u. Ernst Thälmann	VKPD-ZA 第 1 回
1921.02.22-24	H. Brandler, Hugo Eberlein, E. Däumig, Ruth Fischer, Fritz Heckert, Paul Levi, Arkadi Maslow, Wilhelm Pieck, Walter Stoecker, August Thalheimer, Ernst Thälmann, Clara Zetkin	VKPD-ZA 第 2 回
1921.03.17	Heinrich Brandler, Ernst Friesland, Fritz Heckert, Wilhelm Pieck, Clara Zetkin	VKPD-ZA 第 3 回
1921.04.07-08	Heinrich Brandler, Hugo Eberlein, Ruth Fischer, Fritz Heckert, Wilhelm Pieck, Walter Stoecker, August Thalheimer, Clara Zetkin	VKPD-ZA 第 4 回
1921.05.03-05	Hugo Eberlein, Ruth Fischer, Curt Geyer, Fritz Heckert, Edwin Hoernle, Wilhelm Koenen, Paul Levi, Arkadi Maslow, Ernst Meyer, Wilhelm Pieck, Hermann Remmele, August Thalheimer, Ernst Thälmann	VKPD-ZA 第 5 回
1921.08.02-03	Hugo Eberlein, Franz Dahlem, Ernst Friesland, Wilhelm Koenen, Arkadi Maslow, Ernst Meyer, Wilhelm Pieck, Walter Stoecker, Hans Tittel, Ernst Thälmann, Clara Zetkin	VKPD-ZA 第 6 回
1921.11.16-17	Hugo Eberlein, Ruth Fischer, Ernst Friesland, F. Heckert, Ernst Meyer, Paul Neumann, W. Pieck, August Thalheimer, Hans Tittel, Walter Ulbricht, Jakob Walcher, Clara Zetkin + Karl Becker, Ernst Friesland	KPD-ZA 第 1 回
1922.01.22-23	Karl Becker, Hugo Eberlein, Hermann Duncker, Friesland, Heckert, Hoernle, Koenen, Ernst Meyer, Wilhelm Pieck, August Thalheimer, Ernst Thälmann, Walter Ulbricht, Clara Zetkin	KPD-ZA 第 2 回
1922.05.14-15	Hermann Duncker, F. Heckert, Hoernle, Iwan Katz, Koenen, Ernst Meyer, Wilhelm Pieck, Remmele, Stoecker, Walcher, Zetkin	KPD-ZA 第 3 回
1922.07.23	Ruth Fischer, F. Heckert, Koenen, Maslow, Ernst Meyer, Wilhelm Pieck, Stoecker, Hans Tittel, Walcher	KPD-ZA 第 4 回
1922.10.15-16	H. Brandler, Hermann Duncker, Ruth Fischer, Fritz Heckert, Hoernle, Maslow, Wilhelm Pieck, Remmele, Thalheimer, Ernst Thälmann, Walter Ulbricht, Clara Zetkin	KPD-ZA 第 5 回
1922.12.13-14	H. Brandler, Ruth Fischer, Fritz Heckert, W. Pieck, Stoecker, Thalheimer, Ernst Thälmann, Walter Ulbricht, Jakob Walcher	KPD-ZA 第 6 回
1923.05.16-17	Brandler, Böttcher, Duncker, Eberlein, Heckert, Koenen, Maslow, Pieck, Stoecker, Thalheimer, Walter Ulbricht	KPD-ZA 第 1 回
1923.08.05-16	Böttcher, Brandler, Ruth Fischer, Hoernle, Koenen, Maslow, Ernst Meyer, Wilhelm Pieck, Stoecker, August Thalheimer	KPD-ZA 第 2 回
1923.11.03	Heinrich Brandler, Ruth Fischer, Ernst Thälmann, Walter Ulbricht	KPD-ZA 第 3 回
1924.02.19	Heinrich Brandler, Ruth Fischer, Koenen, Wilhelm Pieck, Remmele, Stoecker, Thalheimer, Tittel, Walter Ulbricht	KPD-ZA 第 4 回
1924.05.11	Maslow u. Schneller	KPD-ZA 第 1 回
1924.07.19-20	〔記載無し〕	KPD-ZA 第 2 回
1924.10.18-19	Hugo Eberlein, Ph. Dengel, Ruth Fischer, Fritz Heckert, E. Hoernle, Iwan Katz, Ernst Meyer, W. Pieck, H. Remmele, E. Schneller, Werner Scholem	KPD-ZA 第 3 回
1925.01.10-11	Ruth Fischer, E. Hoernle, Ernst Schneller, W. Scholem, Ernst Thälmann, Hans Tittel	KPD-ZA 第 4 回

1925.05.09-10	Geschke, Ruth Fischer, Ernst Meyer, Ernst Schneller, Werner Scholem, Ernst Thälmann	KPD-ZA 第 5 回
ZK		
1925.07.22	C. Blenkle, A. Ewert, Ruth Fischer, W. Florin, Fritz Heckert, Werner Scholem, Ernst Thälmann	
1925.08.06-07	O. Geschke, Ruth Fischer, W. Florin, Fritz Heckert, W. Pieck, J. Schehr, Werner Scholem, Ernst Thälmann	
1925.09.01	Eberlein, Geschke, Ruth Fischer, Ernst Thälmann	
1925.09.11	Eberlein, A. Ewert, Geschke, Ruth Fischer, Florin, Remmele, J. Schehr, Ernst Thälmann	
1925.0923-24	Ph. Dengel, A. Ewert, O. Geschke, R. Fischer, W. Koenen, W. Pieck, H. Remmele, W. Scholem, Ernst Thälmann	
1925.10.20	C. Blenkle, Ph. Dengel, A. Ewert, W. Florin, F. Heckert, J. Lenz, D. S. Manuilski, W. Pieck, H. Remmele, J. Schehr, W. Scholem, Ernst Thälmann	
1925.10.29	Dengel, A. Ewert, Florin, Hckert, Lenz, Pieck, Remmele, Schehr, Scholem, Thälmann	
1925.11.11	Dengel, A. Ewert, Florin, Koenen, Schneller, Ernst Thälmann	
1925.12.10	Dengel, A. Ewert, Lenz, Remmele, Schehr, Schneller, Thälmann	
1926.01.08	F. Dahlem, Ph. Dengel, A. Ewert, W. Florin, O. Geschke, F. Heckert, J. Lenz, H. Remmele, P. Schimanski, E. Schneller, E. Thälmann	
1926.01.26	C. Blenkle, Ph. Dengel, H. Eberlein, A. Ewert, W. Florin, F. Heckert, J. Lenz, Ernst Meyer, W. Pieck, H. Remmele, J. Schehr, E. Thälmann	
1926.01.30	〔記載無し〕	
1922.02.10	Ph. Dengel, H. Eberlein, A. Ewert, J. Lenz, Ernst Meyer, Ernst Thälmann	
1926.04.09	H. Eberlein, A. Ewert, W. Florin, F. Heckert, Ernst Meyer, W. Pieck, H. Remmele, P. Schimanski, E. Schneller	
1926.04.16	W. Florin, E. Schneller, E. Thälmann	
1924.04.30	A. Ewert, Pieck, P. Schlecht, Ernst Thälmann	
1926.06.04	Ph. Dengel; A. Ewert; W. Florin; F. Heckert, J. Lenz; W. Pieck, J. Schehr, P. Schimanski; E. Thälmann	
1926.07.08	A. Ewert, Ph. Dengel, Ruth Fischer, W. Florin, F. Heckert, A. Maslow, W. Pieck, J. Schehr, P. Schimanski	
1926.08.06	H. Eberlein, A. Ewert, F. Heckert, J. Lenz, A. Maslow, Ernst Meyer, H. Neumann, J. Schehr, P. Schimanski, E. Schneller, E. Thälmann	
1926.08.19	K. Blenkle, Ph. Dengel, A. Ewert, F. Heckert, J. Lenz, H. Neumann, W. Pieck, H. Remmele, J. Schehr, P. Schimanski, E. Schneller, E. Thälmann	
1926.09.16	A. Ewert, Manuilski, Neumann, Pieck, Schehr, Schlecht, Herta Sturm, Thälmann	
1926.11.05	Ph. Dengel, W. Florin, J. Lenz, Ernst Meyer, W. Pieck, E. Thälmann	
1926.11.10	Ph. Dengel, W. Florin, F. Heckert, W. Koenen, J. Lenz, Ernst Meyer, J. Schehr, P. Schlecht, E. Thälmann	
1926.11.18	Ph. Dengel, F. Heckert, E. Thälmann	
1927.01.10	Ph. Dengel, A. Ewert, F. Heckert, J. Lenz u. P. Schlecht	
1927.03.02-03+07	〔記載無し〕	
1927.04.01	C. Blenkle, F. Dahlem, A. Ewert, Ernst Meyer, J. Schehr, E. Schneller, W. Stoecker, E. Thälmann, W. Ulbricht	
1927.05.05	C. Blenkle, Ph. Dengel, A. Ewert, W. Florin, F. Heckert, W. Koenen, J. Lenz, Helene Overlach, E. Thälmann	
1927.06.16	F. Dahlem, H. Eberlein, F. Heckert, Ernst Meyer, W. Stoecker, Hans Tittel, W. Ulbricht	
1927.07.21	Ph. Dengel, W. Florin, Paul Merker, Ernst Meyer, E. Schneller	
1927.09.08-09	Ph. Dengel, W. Florin, F. Heckert, W. Koenen, J. Lenz, W. Pieck, J. Schehr, Ernst Schneller, Ernst Thälmann, Clara Zetkin	
1927.10.08-09	F. Dahlem, Ph. Dengel, Gerhart Eisler, A. Ewert, Leo Flieg, F. Heckert, W. Koenen, J. Lenz, P. Merker, H. Overlach, E. Schneller, E. Thälmann, W. Ulbricht	

1928.03.14	Ph. Dengel, H. Eberlein, G. Eisler, W. Florin, H. Overlach, H. Remmele, E. Thälmann	
1928.06.25-27	C. Blenkle, Ph. Dengel, G. Eisler, W. Florin, O. Geschke, W. Koenen, J. Lenz, P. Merker, H. Overlach, E. Schneller, W. Stoecker, E. Thälmann, Walter Ulbricht	
1928.09.26-27	Franz Dahlem; Philipp Dengel; Hugo Eberlein; Gerhart Eisler; W. Florin; J. Lenz; P. Merker; H. Neumann; W. Pieck; Hermann Remmele; J. Schehr; E. Schneller; Walter Stoecker; E. Thälmann	ヴィトルフ・スキャンダル関連
1928.10.19-20	F. Dahlem, Ph. Dengel, G. Eisler, A. Ewert, W. Florin, P. Merker, H. Neumann, L. Overlach, W. Pieck, H. Remmele, E. Schneller, E. Thälmann, W. Ulbricht	
1928.11.02	W. Florin; F. Heckert; P. Merker; H. Neumann; H. Remmele;? Smolka; Hans Tittel; E. Thälmann; W. Ulbricht; H. Warnke	
1928.12.13-14	F. Dahlem, P. Dengel, A. Ewert, W. Florin, O. Geschke, F. Heckert, W. Koenen, J. Lenz, P. Merker, Ernst Meyer, H. Neumann, H. Remmele, E. Thälmann	
1929.01.11	〔記載無し〕	
1929.01.24-25	初日:W. Florin, O. Geschke, Ernst Meyer, L. Overlach, H. Remmele, W. Stoecker, E. Schneller, E. Thälmann、2 日目:F. Dahlem, W. Koenen, J. Lenz, P. Merker, Ernst Meyer, H. Remmele, J. Schehr	
1929.03.14	F. Dahlem, H. Eberlein, L. Flieg, W. Florin, F. Heckert, J. Lenz, P. Merker, H. Neumann, H. Remmele, J. Schehr, E. Schneller, E. Thälmann, W. Ulbricht	
1929.06.1-2, 8, 15	〔記載無し〕	
1929.08.13-14	F. Dahlem, L. Flieg, F. Heckert, W. Koenen, P. Merker, H. Overlach, H. Remmele, J. Schahr, W. Ulbricht	
1929.10.24-25	F. Dahlem, W. Florin, F. Heckert, W. Koenen, J. Lenz, H. Neumann, H. Overlach, W. Pieck, H. Remmele, E. Thälmann	
1929.11.28-29	F. Dahlem, W. Florin, W. Koenen, P. Merker, H. Overlach, W. Pieck, J. Schehr, W. Stoecker, E. Thälmann, W. Ulbricht	
1930.03.20-21	F. Dahlem, Leo Flieg, W. Florin, W. Koenen, J. Lenz, P. Merker, H. Overlach, H. Remmele, J. Schehr, E. Thälmann, W. Ulbricht	
1930.07.16-17	Ph. Dengel, W. Florin, W. Koenen, P. Merker, W. Pieck, H. Remmele, E. Thälmann, W. Ulbricht	
1931.01.15-17	Ph. Dengel, L. Flieg, O. Geschke, F. Heckert, W. Koenen, J. Lenz, P. Merker, H. Overlach, H. Remmele, E. Thälmann, W. Ulbricht	
1931.05.14-15	F. Dahlem, P. Dengel, L. Flieg, W. Florin, F. Heckert, W. Koenen, J. Lenz, W. Pieck, H. Remmele, J. Schehr, E. Thälmann	
1931.07.22	Ph. Dengel, J. Lenz, H. Remmele, E. Thälmann	
1932.02.20-23	前半:F. Dahlem, H. Neumann, W. Pieck, H. Remmele, E. Thälmann、後半:O. Geschke, F. Heckert, W. Koenen, J. Lenz, H. Overlach, W. Pieck, H. Remmele, J. Schehr, E. Thälmann	
1932.05.24	L. Flieg, W. Florin, W. Pieck, H. Remmele, E. Thälmann, W. Ulbricht	
1932.10.15	W. Florin, W. Pieck, J. Schehr und E. Thälmann	
1933.02, 1933.05	〔記載無し〕	
1935.01.30	〔記載無し〕	
1935.10.15	Dahlem, Flieg, Florin, Merker, Pieck, Ulbricht	
1938.05.14	〔記載無し〕	

(出所)http://www.argus.bstu.bundesarchiv.de/ry1/index.htm?kid=titelblatt の「1.4. Tagungen des Zentralausschusses und Zentralkomitees」から抜粋。(注)KPD、VKPD は略語欄参照。

13. KPD の下部組織・支持組織と分裂グループ

13.1. 下部組織・支持組織

KPD の下部組織ないし支持組織は「革命的大衆組織」(Revolutionäre Massenorganisationen)と称され、以下が挙げられた:

表 12 KPD 下部組織・支持組織(「革命的大衆組織」)

Kommunistischer Jugendverband 共産主義青年同盟
Roter Frontkämpferbund 赤色戦線戦士同盟
Roter Frauen- und Mädchenbund 赤色女性少女同盟
Rote Hilfe Deutschlands ドイツ赤色救援会
Arbeiter-Radio-Verbände und Arbeiter-Photographen 労働者ラジオ連盟と労働者写真
Revolutionäre Gewerkschaftsopposition 革命的労組反対派

Bund der Freunde der Sowjetunion (BFSU) ソ連友の会
Kommunistischer Sängerbund 共産主義歌手同盟
Arbeiter-Theater-Bund 労働者劇場同盟
Kampfbund gegen den Faschismus 反ファシズム闘争同盟
Kampfgemeinschaft für Rote Sporteinheit 赤色スポーツのための闘争共同体
Arbeitsgemeinschaft sozialpolitischer Organisationen (Arso) 社会主義組織活動共同体
Bund proletarisch-revolutionärer Schriftsteller プロレタリア革命的作家同盟
Interessengemeinschaft für Arbeiterkultur (IfA) 労働者文化利益共同体
Verband proletarischer Freidenker プロレタリア無神論者同盟
Reichskomitee werktätiger Frauen 勤労女性全国委員会
Kommunistische Studentenfraktion 共産主義学生グループ

（出所）ドイツ連邦公文書館 KPD 目録

13.2.「分裂グループ」

KPD の分裂グループ（Splittergruppierungen der KPD）として以下が挙げられた：

表 13 KPD「分裂グループ」

Kommunistische Arbeiterpartei Deutschlands (KAPD) ドイツ共産主義労働者党
Kommunistische Arbeitsgemeinschaft (KAG) 共産主義労働者共同体
Kommunistische Partei Deutschlands (Opposltion) (KPD(O)) ドイツ共産党（反対派）
Linke kommunistische Splittergruppen 左派共産主義分裂諸グループ
Allgemeine Arbeiter-Union - Einheitsorganisation (AAUE) 一般労働者組合－統一組織
Lenin-Bund レーニン同盟
Nationalrevolutionäre (Nationalkommunistische) Gruppen 国民革命（国民共産主義）諸グループ

（出所）ドイツ連邦公文書館 KPD 目録

（補注 1）戦前 KPD・戦後 SED のイデオローグであったヴィンターニッツ（Joseph Winternitz）

7.5.節末尾に登場し洞察力を示した「党イデオローグのレンツ=ヴィンターニッツ」はダブル姓ではない。レンツはヴィンターニッツ（Joseph Winternitz, Dr. phil., 1896 - 1952）の多くの偽名の 1 つである。

戦前にすでに KPD イデオローグであった彼は、戦後も短期間ながら東独 SED のトップイデオローグであった。それは戦後の東独リーダー・ウルブリヒトの戦前の緊密な協力者であったこととともに、学識・能力ゆえでもあっただろう。

ヴィンターニッツはオックスフォードでインド学・民族学教授（ユダヤ人）の息子として生まれた。誕生年に一家がプラハに移住し、彼は 1916 年までプラハで学び（大学では哲学、数学、物理学）、1917 年オーストリア軍徴兵、翌年社会民主労働者党員、1920 年チェコスロバキア共産党創立参加。1920 年博士号取得。

1923 年ドイツに移り KPD 専従幹部〔党官僚〕になり、党内左派の理論家となる。その際「レンツ（Lenz）やゾマー（Sommer）その他の非常に多様な偽名」を使用。1924 年 KPD 本部書記兼宣伝部長、コミンテルン第 5 回世界大会代表。1925 年第 10 回党大会で中央委員候補になった。

1925 年夏に KPD かつその左派のリーダーのフィッシャーとマスロウがコミンテルンからの「公開書簡」によって批判された。〔これは二人がスターリンの介入に抵抗したためで、すでに 8 月に失脚し、二人批判のコミンテルン書簡が同年 9 月 1 日の KPD 機関紙「赤旗」に公開された。〕

その際は彼はフィッシャーらを擁護した。しかしその後ショレムらの極左派とは行動を共にせず、フィッシャーらとも袂を分かった。結局「KPD に留まり、党の路線〔テールマンらコミンテルン忠誠左派〕に適応した」。そのため、第 11 回党大会（1927 年）でも中央委員候補に再任されたものの、重要部署には就けず、雑誌「インターナショナル」編集者など「あまり重要でない職務のみ」担った。

しかしテールマンが絡むヴィトルフ・スキャンダル（**補注 2** 参照）のあと彼は復活し、中央委員会アジプロ部長になり（クラウスの偽名で）、第 12 回党大会（1929 年）では中央委員に選ばれた。

ところが彼は 1931 年に「スターリンを“間違って解釈”し、レーニンを“誹謗”した」と「称する理由」で解任され、「同志テールマンの論文…において批判された私の仕事上の誤りを無条件に認める」云々という自己批判を余儀なくされた。

ナチ政権成立後も彼はドイツ国内に残り、国内指導部（Müller-Enbergs（2010:1431）では「KPD 中央指導部」）のウルブリヒトに「緊密に協力」した。

〔ウルブリヒトらがパリに去ったあと〕1933 年 12 月にプラハへ亡命して KPD 外国組織に所属した。1935-39 年にはチェコスロバキア共産党に所属し、宣伝・教育活動に従事。1939 年 3 月英国籍保有者としてロンドンに亡命し、1945 年までチェコスロバキア共産党英国組織に所属。ズデーテンドイツ人問題についての同党との「強い相違」のためチェコに戻らず、1945 年から英国共産党に所属し、1948 年までロンドンでフリーの作家。

1948 年 9 月ドイツに戻り、SED 入党。同年 10 月ベルリン大学教授、同時に〔SED 中央委付属〕党大学科学研究所政治経済学部長などに就任。ファシズム犠牲者として認定。1949 年 3 月の設立と同時に SED 党幹部会付属マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン研究所長就任。

しかし 1950 年 2 月末、いわゆる「スターリンに対する帝国主義者とチトー工作員のキャンペーン」への支持ゆえに同所長解任。そのきっかけは SED 理論誌「Einheit」（統一）における彼の論説「スターリンから学ぶ」に若いスターリンの反レーニン主義的見解を引用したことであった。

彼に対する非難は上記キャンペーンを「そうとは知らずに（ungewollt）支持した」ことに留まり、彼は 1950 年 3 月 フンボルト大学経済学部長に任命された。

しかし彼は英国にいる家族への心配を理由に英国へ戻ることを選んだ。「スターリン主義的な方法」に精通した彼にはこうした「イデオロギー的攻撃」の結末が明らかだったがゆえの選択だっただろう。しかし彼はすぐ、1952 年 3 月 22 日に英国で死亡し、SED は彼の死亡記事に「ある種の動揺が全くなかったわけではない」と書き添えた。（Weber 2008:1032f.; Müller-Enbergs 2010: 431）.

（補注 2）ヴィトルフ・スキャンダル（Wittorf-Affäre）

このスキャンダルは、テールマンの「娘婿」と言われることが多いヴィトルフ（John Friedrich Wittorf、1894-1981）による党資金横領と当時党議長のテールマンによるその隠蔽の試みを指す。

これらの発覚により 1928 年 9 月に KPD 中央委員会がエールマンの議長解任を全員一致で決定し、彼も同意した。

ところがスターリンが介入して同年 10 月に〔コミンテルン忠誠派の〕テールマンを復職させた。スターリンは内紛収拾のために〔気に入りでモスクワにいた〕ノイマンを派遣した。ノイマンは政治書記局（Polsekretariat）員になり、テールマンやレメレとともに KPD の「決定的指導者」〔「三頭政治」〕になった（Weber 2008:635,927）。

ハンブルクの港湾労働者であったヴィトルフは 1917 年 USPD 加入、その左派とともに 1920 年 KPD 加入。ヴィトルフはテールマンの「親友」、かつ彼に「引き立てられた」が、彼と「姻戚関係」〔娘婿〕にあったという「主張は誤りである」。

ヴィトルフは 1925 年党ヴァッサーカンテ地区専従幹部になり、1927 年第 11 回党大会で中央委員に選出された。翌年に彼の支出がその収入に不相応との情報が増え、会計監査の結果不正が発覚した。彼は不正を地区指導部会計課係のせいにしようとしたが、彼の 1800 マルク着服が判明した。のちに着服額はより高額だと立証された。それらはコミンテルンからの「秘密資金」であった。

〔このように KPD が各種組織維持費・活動費の多くをコミンテルンに依存したことがコミンテルン忠誠の要因の 1 つであっただろう。それは生活をそうした資金に依存した「党機構派」（党官僚）特に該当した。〕

「テールマンは着服隠蔽に努力し」、ヴィトルフが当該金額を返済のために調達できるように試みた。しかしその間に「宥和派」のエバーラインやアイスラーがこの件について中央委員会に警告した。その結果ヴィトロフは 1928 年 9 月 KPD 除名、隠蔽工作のテールマンは「一時的職務停止」になった（Weber 2008:1038f.）。「一時的…」はスターリンの介入の結果である。

〔最も忠実なテールマンの権威失墜対策としてスターリンは子飼い（と思っていただけだが）のノイマンを送り込み、テールマン・レメレ・ノイマンの三頭体制にした。しかし忠実なのはテールマンだけで、二人は抵抗し粛清された。

KPD の進路選択は党内決着ではなく、結局ソ連最高指導者の意向次第であった。

とりわけスターリンにはその支配欲のみならず、KPD がドイツ革命に成功すると、ドイツ工業の強さゆえにコミンテルンでの主導権を奪われるという恐怖があり、1931 年から KPD の闘争力を弱めるために何でもやったと、のちにノイマンの妻が振り返った（Buber-Neumann 1957:285, J252）。スターリンがヒトラーとの提携を厭わなかったのみならず、KPD 絶滅作戦中の彼と不可侵条約と秘密〔共同侵略〕議定書さえ結んだこともその傍証になるかもしれない。〕

略語

ナチ ＝Nazi（Nationalsozialist の略、複数形は Nazis ナチス）、ナチ党（NSDAP）員の蔑称

AL または ABL = Abschnittsleitung 、地域指導部（KPD が 1937~1939 年にドイツ国内組織指導のために隣接諸国に設置した指導組織）

DDR = Deutsche Demokratische Republik、ドイツ民主共和国（東独）（東独では自国も西独も公式の場でも略称で呼ぶことが多かった。しかし西独では東独をこの略称で呼ぶが、自国の略称（BRD）を嫌い、「連邦共和国」（Bundesrepblik）と略した）

KP-CSR = チェコスロバキア共産党

KAPD = Kommunistische Arbeiterpartei Deutschlands、ドイツ共産主義労働者党

KPD = Kommunistische Partei Deutschlands、ドイツ共産党

KPO = Kommunistische Partei Deutschlands (Opposition)、ドイツ共産党（反対派）

NSDAP = Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei、国家社会主義ドイツ労働者党（ナチ党正式名称）。国家…に代わり、国民…とも、またナチのドイツ民族至上主義に即して民族…とも訳し得る

SAP(D) = Sozialistische Arbeiterpartei (Deutschlands) 、（ドイツ）社会主義労働者党（Sopade に従わない SPD 左派）

SED = Sozialistische Einheitspartei Deutschlands、ドイツ社会主義統一党（東独支配党。1946 年にソ連占領下の東独 KPD が東独 SPD を吸収して成立）

Sopade = Sozialdemokratische Partei Deutschlands、ゾパデ（SOPADE との表記もある。ナチ政権からプラハに亡命した SPD 党幹部会）

SPD = Sozialdemokratische Partei Deutschlands、ドイツ社会民主党

USPD = Unabhängige Sozialdemokratische Partei Deutschlands、ドイツ独立社会民主党（のちに左派は KPD と合同、他は SPD 復帰）

VKPD = Vereinigte Kommunistische Partei Deutschlands、ドイツ合同共産党（KPD は創立まもない 1920 年 12 月に独立社会民主党左派と合同し VKPD と名乗り、**表 11** のように 1921 年 11 月の中央委員会ではすでに KPD に戻った）

ZA = Zentralausschuß、中央委員会（KPD 初期の組織で地区組織の提案に基づいて党大会が選出）〔**7.5.節**参照〕

ZK = Zentralkomitee、中央委員会（1925 年から KPD が採用したボリシェビキ的中央機関で、地区組織の提案なしに党大会が選出）〔ZA との違いは **7.5.節**参照〕

引用文献

本文に記載の URL を除く。各 URL は特記しない限り本稿発表時点有効。引用頁記載の中の「J」は邦訳ページを示す。本稿訳文と邦訳は異なる場合がある。

青木國彦（2016）ローザ・ルクセンブルクの「異論の自由」の意味と衝撃：1988 年 1 月 17 日東独でのローザ・デモ事件に関連して、『ロシア・東欧研究』45

-----（2021）東独体制転換過程の起点となった演出家クリーアと歌手クラウチクの闘い、『社会主義体制史研究』20、in: https://journal-hsss.com

-----（2022）（資料検討）米国ノエル・フィールド関連粛清に関する東独 SED の声明（1950 年 8 月 24 日）、『社会主義体制史研究』27、in: https://journal-hsss.com

カーショー、イアン（川喜田敦子訳 2016）『ヒトラー1889-1936』上、白水社

木村靖二編（2001）『ドイツ史：新版世界各国史 13』山川出版社

沢田干一郎（1976）「コミンフォルムとチトーイズムの発生」、『ソ連・東欧学会年報』5

富永幸生・鹿毛達雄・下村由一・西川正（1997）『ファシズムとコミンテルン』東京大学出版会

ディミトロフ（高山洋吉訳 1955）『国会議事堂放火裁判』門脇書店

フレヒトハイム、オシップ（足利末男訳 1971）『_ヴァイマル共和国時代のドイツ共産党』東邦出版（付録の年表は訳者による）

フレーリヒ、パウル（伊藤成彦訳 1991）『ローザ・ルクセンブルク：その思想と生涯』御茶の水書房

不破哲三(2014)「日本共産党の理論活動史」後半、in: https://www.jcp.or.jp/akahata/aik14/2014-05-15/2014051509_01_0.html
村田陽一編訳(1978)『コミンテルン資料集』第 1 巻、大月書店
-----(1980)『コミンテルン資料集』第 3 巻、大月書店
-----(1981)『コミンテルン資料集』第 4 巻、大月書店
-----(1982)『コミンテルン資料集』第 5 巻、大月書店
盛田常夫(2020)『体制転換の政治経済社会学』日本評論社
レーニン、ヴェ・イ(1920)共産主義内の"左翼主義"小児病、『レーニン全集』(大月書店)第 31 巻:3-107 所収
-----(1920a)「共産主義インタナショナル第二回大会の基本的任務についてのテーゼ」、『レーニン全集』(大月書店)第 31 巻:176-193 所収
-----(1922)イェ・エス・ヴァルガへ、『レーニン全集』(大月書店)第 45 巻:651-652 所収
ロンドン、アルトゥール(1972)『自白:プラハ裁判煉獄記』上下、サイマル出版会
archivesportaleurope.net, „2. Politbüro" 〔ドイツ連邦公文書館所蔵 KPD 政治局文書の要旨紹介で、編者 4 人の名前もある〕, in: https://www.archivesportaleurope.net/advanced-search/search-in-archives/results-(archives)/?&repositoryCode=DE-1958&levelName=clevel&t=fa&recordId=ry1&c=C90012577
Buber-Neumann, Margarete (1957) *Von Potsdam nach Moskau: Stationen eines Irrweges*, Deutsche Verlags-Anstalt. マルガレーテ・ブーバー=ノイマン、片岡啓治訳(1968)「ポツダムからモスクワまで」、筑摩書房編・刊『現代世界ノンフィクション全集』8 所収。この邦訳には Buber-Neumann (1957)の訳とある(同書:130)が、全 11 章(エピローグを含む)の訳ではなく 3 つの章の抄訳である。また著者名を Margrete と誤記、そのため訳文でもマルグレーテとなっている。
----- (1997) (初版 1949) *Als Gefangene bei Stalin und Hitler*, Ullstein. 直井武夫訳(1954)『第三の平和』(共同出版社、2 分冊、手元には「ヒトラーへのプレゼント」以後の第 2 部のみ)、林晶訳(2008)『スターリンとヒットラーの軛のもとで』(ミネルヴァ書房)。
Duhnke, Horst (1972) *Die KPD von 1933 bis 1945*, Kiepenheuer & Witsch. 救仁郷繁訳(1974-1975)『ドイツ共産党一九三三ー四五年』上下、ぺりかん社
Hortzschansky, Günter u.a. (Autorenkollektiv) (1978), *Illustrierte Geschichte der deutschen Novemberrevolution 1918-19*, Dietz.
----- u.a. (Hg.)(1978a) *Protokoll des Gründungsparteitages der Kommunistischen Partei Deutschlands (30. Dez. 1918 - 1. Jan. 1919)*, Dietz.
Leonhard, Wolfgang (1989) *Der Schock des Hitler-Stalin-Paktes*, Knesebeck u. Schuler, レオンハルト(1992)(菅谷泰雄訳 1992)『裏切り』創元社
Levi, Paul (Hg. und Einletung) (1922) *Die Russische Revolution: Aus dem Nachlass von Rosa Luxemburg*, Verlag Gesellschaft und Erziehung.
Luxemburg, Rosa (1918) Zur die Russische Revolution, in: *Gesammelte Werke*, Bd.4, Dietz (1974). 邦訳は伊藤成彦・丸山敬一編訳著(1985)『ロシア革命論:ローザ・ルクセンブルク』論創社所収。全集第 6 版(2000 年)所収の全文が下記に: https://www.marxists.org/deutsch/archiv/luxemburg/1918/russrev/
----- (1918a) Rede für die Beteiligung der KPD an den Wahlen zur Nationalversammlung, in: *Gesammelte Werke*, Bd.4, Dietz (1974). これは KPD 創立大会初日、1918 年 12 月 30 日の彼女の演説である(Weber 2008:28)。
彼女のこの演説は東独版全集第 4 巻初版 481 頁以下所収だが、1979 年第 2 版以後は 479 頁以下になった。第 2 版が初版から「Der Weg zum Nichts」(423-4 頁)を削除したためである。しかし「改訂第 2 版」とせず単に「第 2 版」とある。東独最後の 1990 年第 5 版も第 2 版と同じである。
この削除部分には、ルクセンブルクが Juvenis という偽名で署名したという注記があった(1974 年版 S.423)。
なお東独版全集の第 1-2 巻、第 2 巻、第 3 巻、第 5 巻には初版と第 5 版に少なくとも頁数の増減はない。第 1-1 巻は第 2 版と第 5 版の間の増減無ししか確認していない。
東北大学図書館の書誌情報には第 4 巻の初版から第 4 版まで「内容に相違なし」とあるが、上記のようにも実際は異なる。他の巻の一部にも同じ記載があるが、いずれも「改訂版」表示がないという意味であって、「内容」確認ではない。
(MEW) *Marx, Karl - Friedrich Engels Werke*, Bd.19, Dietz (1987), 大内兵衛他監訳『マルクス=エンゲルス全集』第 9 巻、大月書店
Müller-Enbergs, Helmut u.a. (Hg.) (2010), *Wer war wer in der DDR*, Ch. Links.
Schabowski, Günter (1991) *Der Absturz*, Rowohl.
Tutas, Herbert E. (1973) *NS-Propaganda und deutsches Exil 1933-39*, G. Heintz
Weber, Hermann (1969) *Die Wandlung des deutschen Kommunismus*, Bd.1 & 2, Europäische Verlagsanstalt.
----- (Hg.) (1993) *Die Gründung der KPD: Protokoll und Materialien des Gründungsparteitages der Kommunistischen Partei Deutschlands 1918/1919,* Dietz.
-----, A. Herbst (2008) *Deutsche Kommunisten: Biographisches Handbuch 1918 bis 1945*, 2. überarbeitete und stark erweiterte Auflage, Karl Dietz.

『社会主義体制史研究』既刊

Historical Studies of Socialist System (past issues)

in: https://journal-hsss.com

No. 29 (May. 2022)

Eva Hanada
Book Review：
The EU's Eastward Enlargement by Yoji Koyama, 2015

No. 28 (May. 2022)

青木國彦
Kunihiko AOKI
プーチンとスターリン
Putin und Stalin
プーチンとスターリン（補足）
Putin und Stalin (Ergänzung)

No. 27 (Feb. 2022)

青木國彦
【資料検討】米国ノエル・ フィールド関連粛清に関する東独 SED の声明（1950 年 8 月 24 日）
Kunihiko AOKI
Dokument-Überprfung: "Erklärung des ZK und der ZPKK der SED zu den Verbindungen ehemaliger deutscher politischer Emigranten zu dem Leiter des USC Noel H. Field" (24. Aug. 1950)

No. 26 (Feb. 2022)

Yoji Koyama
What was Soviet and East European Socialism: Its Historical Lessons and Future Society

No. 25 (Dec. 2021)

Benon Gaziński
Roman Dmowski on relations with Russia at the turn of the 19th and 20th centuries and in the interwar period. "Historia magistra vitae est" - what could be learned from that history lesson?

No. 24 (Dec. 2021)

Benon Gaziński
System transformation vs. European integration.: A case study of Poland and her agriculture in historical retrospection

No. 23 (Oct. 2021)

青木國彦
東独秘密警察をめぐる女優グレルマンと元夫・俳優ミューエの争い：ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して
Kunihiko AOKI
Der Streit Jenny Gröllmanns mit Ex-Ehemann Ulrich Mühe über die Stasi-Verstrickungen: Im Zusammenhang mit dem Film "Das Leben der anderen"

No. 22 (Sep. 2021)

Yoji Koyama
Emigration from and Immigration to Poland: A Typical Case of Central Europe

No. 21 (Sep. 2021)

青木國彦
東独秘密警察（シュタジ）の作戦規定と組織：ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して
Kunihiko AOKI
Operative Bestimmungen und Organisationen der Staatssicherheit der DDR: Im Zusammenhang mit dem Film "Das Leben der andere

No.20 (Sep. 2021)

青木國彦
東独体制転換過程の起点となった演出家クリーアと歌手クラウチクの闘い
Kunihiko AOKI
Der Kampf F. Kliers und S. Krawczyks für die Wende in der DDR

No.19 (Aug. 2021)

青木國彦
東独における職業禁止と自由業：ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して
Kunihiko AOKI
Das Berufsverbot und die Freiberufler in der DDR: Im Zusammenhang mit dem Film "Das Leben der anderen"

No. 18 (July 2021)

青木國彦
脚本に見るドイツ映画「善き人のためのソナタ」（原題「他人の生活」）（2）：批評の批評
Kunihiko AOKI
"Das Leben der anderen" im Filmbuch von F. H. von Donnersmarck (2): Rezension der Rezensionen

No. 17 (February 2021)

Yoji Koyama
Germany: Core of EU-Visegrad Economic Relations

No. 16 (December 2020)

Yoji Koyama
Political Economy of the Baltic States

No. 15 (December 2020)

Yoji Koyama
Slovenia: the Best Performer of the Former Yugoslavia

No. 14 (December 2020)

青木國彦
脚本に見るドイツ映画「善き人のためのソナタ」（原題「他人の生活」）（1）：宣伝と実際
Kunihiko AOKI
"Das Leben der anderen" im Filmbuch von F. H. von Donnersmarck (1): Werbung und Wirklichkeit

No. 13 (June 2020)

青木國彦
アンソロジー「ベルリン物語」をめぐる東独作家たちの野望とシュタジの陰謀：東独ホーネッカー政権初期の自由化について(3)
Kunihiko AOKI
Die heimliche Kämpfe um die Anthologie »Berliner Geschichten« in der DDR: Über Honeckers

„Liberalisierung“ (1971-75) in der DDR (3)

No. 12 (Feb. 2020)

青木國彦
東独文化政策の規制と緩和（1963-1976 年）－東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について（2)－
Kunihiko AOKI
Die schwankende Kulturpolitik in der DDR (1963-76): Über Honeckers „Liberalisierung“ (1971-75) in der DDR (2)

No. 11 (Nov. 2019)

Yoji Koyama
Emigration from Lithuania and Its Depopulation

No. 10 (Sep. 2019)

青木國彦
1973 年第 10 回世界青年学生祭典（東ベルリン）に見る自由化百景－東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について（1)－
Kunihiko AOKI
Hundert Ansichten der X. Weltfestspiele der Jugend (Ostberlin, 1973): Über Honeckers „Liberalisierung “ (1971-75) in der DDR (1)

No. 9 (Aug. 2019)

青木國彦
東独通貨マルクの対外関係： 最低交換義務、公式・ヤミレート、末期状況
Kunihiko AOKI
Auswärtige Beziehungen der DDR-Mark: Das Mindestumtausch, die Kurse und die letzte Zustände

No. 8 (June 2019)

青木國彦
東独通貨マルクのヤミレートの暴落（1987 年 1 月）
Kunihiko AOKI
Der inoffizielle Kurs der DDR-Mark purzelte dramatisch (Jan. 1987)

No. 7 (May 2019)

Yoji Koyama
Emigration from Romania and Its Depopulation

No. 6 (Jan. 2019)

青木國彦
ケネディのベルリン演説（1963 年 6 月）再考： ブラント東方政策との比較
Kunihiko AOKI
A Rethinking of J. F. Kennedy’s Address at the West Berlin Town Hall (June 26, 1963): In comparison to the “New Ostpolitik” of Willy Brand

No. 5 (Dec. 2018)

青木國彦
東独国境の射撃停止命令（1989 年 4 月 3 日）の混乱とハンガリー国境フェンス撤去 : ベルリンの壁ショッセー通り検問所事件の支配党への衝撃
Kunihiko AOKI
Die ungeordnete „Aufhebung des Schußbefehls“ in der DDR (03.04.1989): Die SED war schockiert über den Fall „Grenzübergangsstelle Chausseestraße“ und den Abbau von Grenzsicherungsanlagen in Ungarn

No. 4 (Nov. 2018)

Yoji Koyama
Migration from New EU Member States in Central and Eastern Europe and Their Depopulation: Case of Bulgaria

No. 3 (Nov. 2018)

青木國彦
ベルリンの壁最後の射殺ギュフロイ事件（1989 年 2 月）の詳細とその意味 :「1988 年 12 月にホーネッカーが射撃命令を制限」（少尉ハンフ法廷証言）の真偽
Kunihiko AOKI
Was war der Fall Chris Gueffroy in der DDR: Eine Überpüfung der Aussage des Unterleutnant Alexander Hanfs „Honecker habe im Dezember 1988 den Schießbefehl eingeschränkt“

No. 2 (Aug. 2018)

青木國彦
CSCE（全欧安保協力会議）ウィーン会議へのホーネッカーとシュタジの対応：東独の新外国旅行政令と「壁は 100 年存続」発言
Kunihiko AOKI
Die Reaktion der DDR-Führung gegen Abschliessendes Dokument des Wiener Treffens der KSZE

No. 1 (May 2018)

青木國彦
元東独政治犯ガルテンシュレーガーの冒険 : 東独国境自動射撃装置 SM-70 奪取の意味と限界
Kunihiko AOKI
Abenteuer des ehemalige politische Häftlings der DDR Michael Gartenschläger: Warum und wofür montierte er die Selbstschußanlagen SM-70 ab?